

平成24年度[2012年度]
橿原市文化財調査年報

奈良県橿原市教育委員会
2014年3月

序

橿原市には、特別史跡藤原宮跡をはじめ、史跡菖蒲池古墳など、さまざまな時代の多くの遺跡や重要文化財に指定された建造物などがあります。

この年報では、平成24年度に行いました遺跡の発掘調査、文化財保護事業、普及啓発事業の概要を報告いたします。

近年では、開発事業に伴う発掘調査だけでなく、植山古墳の整備に向けた学術調査も行い、新たな成果を得ています。また、千塚資料館の改修工事も始まり、新たな文化財の拠点施設が生まれようとしています。

なお、事業を実施するにあたりまして、ご協力いただきました方々ならびにご指導賜りました関係諸機関及び諸氏には心より感謝申し上げます。

平成26（2014）年3月

橿原市教育委員会

教育長 吉本重男

例 言

1. 本書は、奈良県橿原市教育委員会事務局生涯学習部文化財課及び千塚資料館が、平成 24 年度に実施した下記事業の概要をまとめたものである。
 - I. 埋蔵文化財発掘調査事業
 - II. 出土遺物保存処理事業
 - III. 文化財諸申請処理業務
 - IV. 普及啓発事業
 - V. 史跡整備事業
 - VI. 指定文化財維持管理事業
 - VII. だんじり保存事業
2. 各事業の調整事務は、竹田正則、濱口和弘、中川明彦、大北与織が主に行い、他の課員が補佐した。また、I. 埋蔵文化財発掘調査事業、II. 出土遺物保存処理事業についてはその担当を後記文中に記した。
3. I. 埋蔵文化財発掘調査事業のうち、菖蒲池古墳発掘調査は、平成 24 年度市内遺跡発掘調査等事業（平成 24 年度国宝重要文化財等保存整備費補助：国庫補助事業）として実施した。また、II. 出土遺物保存処理事業の木製遺物保存処理、V. 史跡整備事業も同補助事業として実施した。
4. I. 埋蔵文化財発掘調査事業にあたっては、奥山務氏、株式会社廣甚 代表取締役社長 廣岡聖司氏、上島良之氏、嵯山正雄氏、河合清裕氏の方々から多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。
5. 事業実施にあたり、次の機関及び諸氏からご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表すところである。
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部、奈良県教育委員会文化財保存課、奈良県立橿原考古学研究所、石野博信、奥山誠義、木下正史、木場幸弘、白石太一郎、菅谷文則、杉山洋、豊岡卓之、降幡順子、古谷毅、和田萃（個人名は敬称略、五十音順）
6. I. 埋蔵文化財発掘調査事業の挿図における座標値は世界測地系座標である。
7. 本書の編集は、課員の協力のもと田原明世が行った。

目 次

序

例言・目次

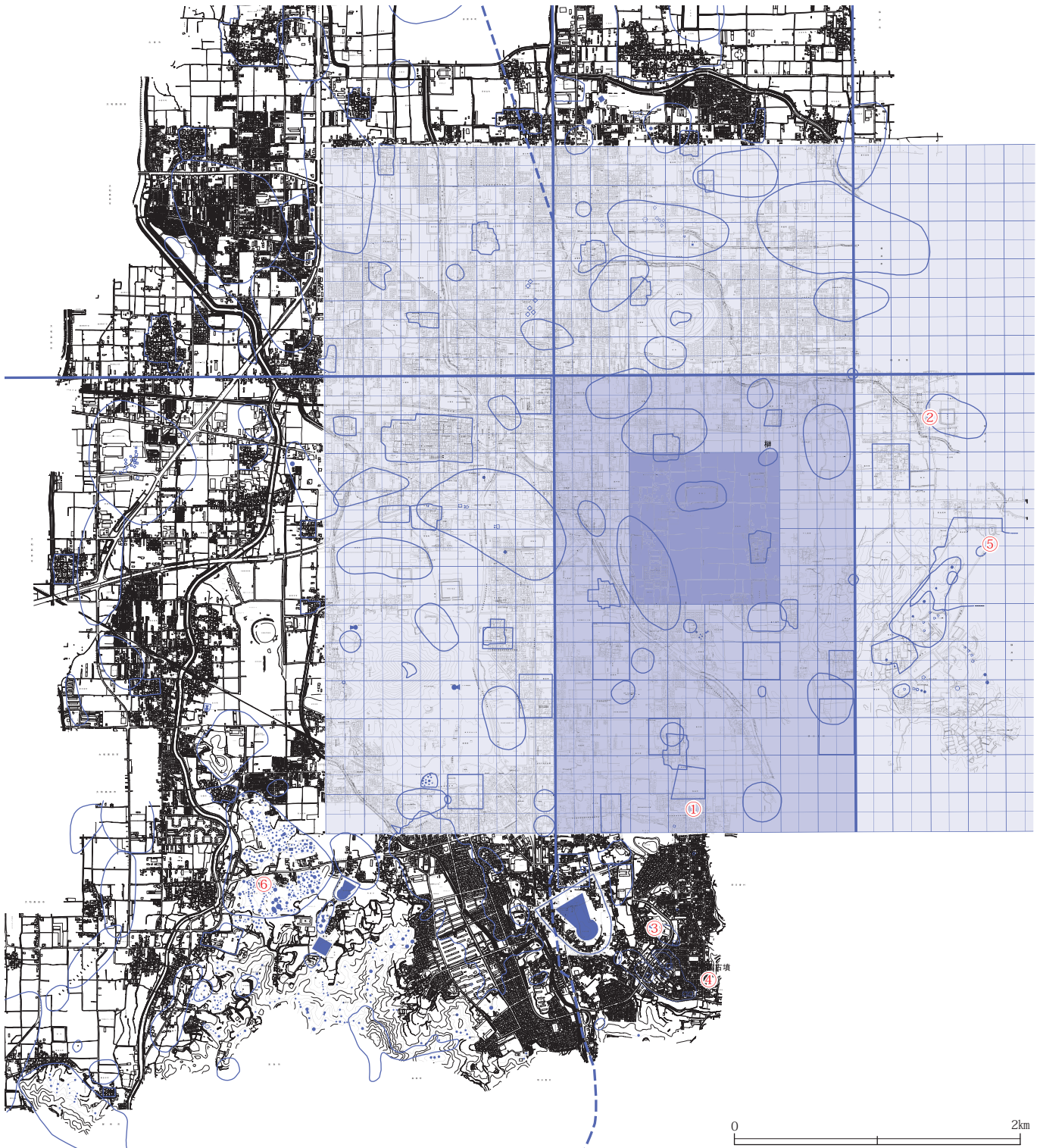
I. 埋蔵文化財発掘調査事業	1
平成 24 年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	1
平成 24 年度埋蔵文化財発掘調査地位位置図	1
埋蔵文化財発掘調査概要報告	2
藤原京右京十二条一坊（橿教委 2012 - 1 次）	2
藤原京左京一・二条六・七坊、黒田池遺跡（橿教委 2012 - 2 次）	14
史跡 植山古墳（橿教委 2012 - 3 次）	22
菖蒲池古墳（橿教委 2012 - 4 次）	30
大藤原京左京五条八坊（橿教委 2012 - 5 次）	38
千塚山遺跡（橿教委 2012 - 6 次）	46
II. 出土遺物保存処理事業	52
III. 文化財諸申請処理業務	52
IV. 普及啓発事業	53
V. 史跡整備事業	58
VI. 指定文化財維持管理事業	59
VII. だんじり保存事業	59

I.埋蔵文化財発掘調査事業

平成24年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	調査回数	遺跡名	調査地	調査面積	調査期間
①	2012 - 1次	藤原京右京十二条一坊	和田町70、71-1、72-1、73-1・2、74-1、75-4、168-1、169-1・2・5、170-1・2、171-1・3・4、172-5・6・7	77.2㎡	24.4.3~24.5.11
②	2012 - 2次	藤原京左京一・二条六・七坊 黒田池遺跡	膳夫町443-1、464-1、465、466 出垣内町4、5	365.0㎡	24.4.16~24.6.1
③	2012 - 3次	史跡 植山古墳	五条野町地内	1,200.0㎡	24.7.26~25.2.28
④	2012 - 4次	菖蒲池古墳	菖蒲町地内	172.5㎡	24.12.11~25.3.15
⑤	2012 - 5次	大藤原京左京五条八坊	東池尻町地内	350.0㎡	24.11.19~25.2.15
⑥	2012 - 6次	千塚山遺跡	川西町753他	650.0㎡	25.1.28~25.3.15

調査回数は、発掘調査開始順（一部準拠しないものもある。）に当教育委員会が付したものである。またNo.は下図の数字と対応している。



平成24年度 埋蔵文化財発掘調査地位位置図 (S=1/40,000)

藤原京右京十二条一坊

調査地 檀原市和田町地内

調査期間 平成24年4月3日～5月11日

調査面積 77.2㎡

調査原因 分譲宅地造成

1. はじめに

藤原京跡は奈良県檀原市・桜井市・高市郡明日香村にまたがる遺跡であり、その多くは檀原市に含まれている。本調査地である藤原京右京十二条一坊は、藤原京の南端に位置し、東を朱雀大路、南を阿倍山田道と隣接する条坊であり、調査地の北東約150mの地点には和田廃寺があり、調査地の南約100mの地点には阿倍山田道が通ると考えられる。

地理的な特徴としては、調査地を含む檀原市南部は、竜門山地から派生する丘陵の北端にあたり、調査地は、丘陵の北端の斜面に位置する。さらに丘陵の縁辺には多くの小支谷があり、調査地は南北に延びる小支谷の東斜面上にもあたる。したがって調査地は、全体としては南～西方向に傾斜する斜面上に立地しているといえる。

また、本調査に先立ち、平成24年3月7・8日に試掘調査を実施し、遺構の存在を確認した開発予定地の西端部のうち、遺構の保存が困難な範囲について、発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、藤原京南端部の丘陵における藤原京期の造成に関わる遺構の検出が想定された。

2. 調査の方法と層序

本調査では、重機により表土から中世以降の旧耕土までを除く後、上層遺構面の調査を実施した。上層遺構の調査後は、地山上面まで、数度に分けて遺構検出を繰り返しながら人力で掘り下げた後、下層遺構の調査を実施した。

遺構の図化は、本調査区内に設定した基準点をもとに地区杭を設定し、実測作業を行った。なお地区杭の設定は、各遺構面毎に行った。また、本調査後は、調査区を埋め戻した上で、事業者へ引き渡した。

なお、本調査では、遺跡への影響がある道路部分の全域を調査区とした。そのため本調査区の主軸は、地形の傾斜の主軸とは直交していない。

本調査区の基本層序は、堆積時期と性格から以下の5層にまとめることができる。

- I層 現代盛土（宅地造成による）
- II層 盛土（中世以降）
- III層 盛土（中世）
- IV層 盛土（古墳時代～飛鳥時代。上面が上層遺構検出面）
- V層 地山（上面が下層遺構検出面）

以下、本調査区の層序を説明する。

I層は、本調査地を宅地化する際に行った現代の盛土である。出土遺物はない。上面の標高は88.9～89.4mである。

II層は、褐色砂質土及び灰褐色砂質土を主体とする。下面は東から西にむけて段々に下がっているため、段々の地形に盛土し、平坦地に造成したと考えられる。中世の遺構である溝（14SD）を破壊していることから、中世以降の盛土と考

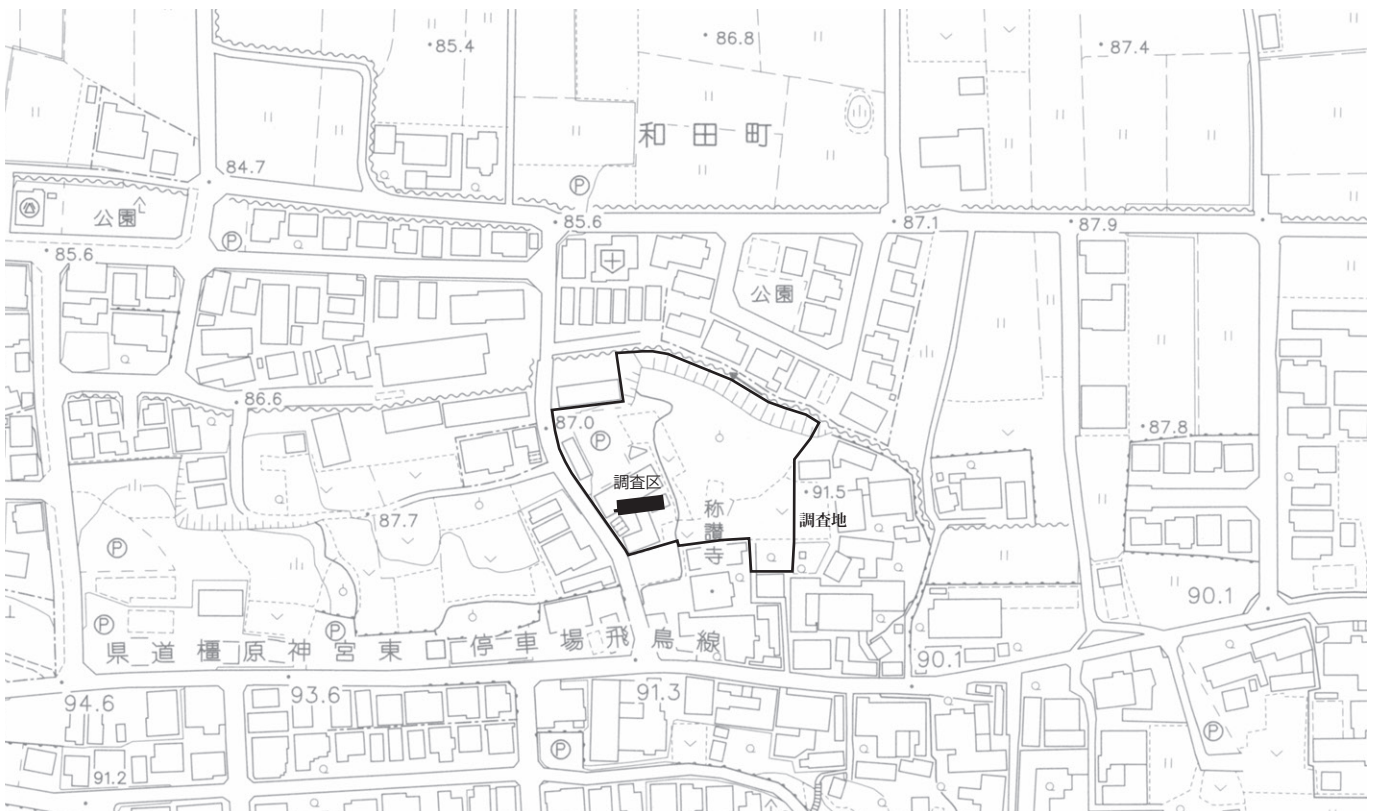
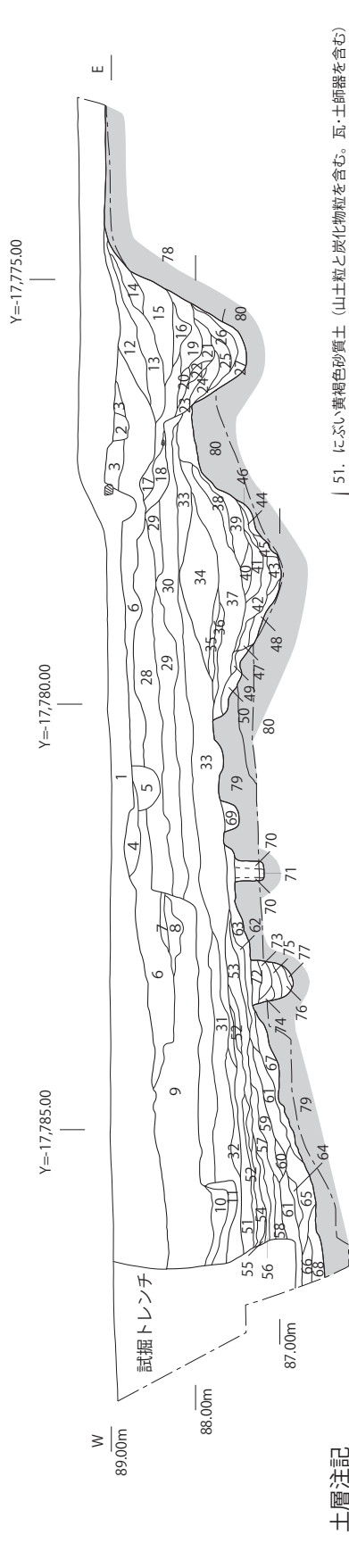


図1 発掘調査区位置図：調査区と周辺の地形（S=1/2,500）



土層注記

- I層 { 1. 盛土
2. 灰黄褐色砂質土
3. 褐色砂質土 (バイラン土を多く含む)
4. 褐色砂質土 (山土粒を含む。瓦器含む)
5. 褐灰色砂質土
6. 褐色砂質土 (山土粒を含む。硬くしまる)
7. 灰褐色砂質土
8. 灰褐色砂質土 (山土粒を含む)
9. にぶい赤褐色砂質土 (山土プロックと炭化物粒を含む。硬くしまる。瓦器含む)
10. 褐灰色砂質土 (山土粒と炭化物粒を含む)
11. 褐色砂質土
12. 褐色砂質土
13. 褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
14. 褐色砂質土 (砂質強い)
15. 灰黄褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
16. にぶい褐色バイラン土
17. 灰白色粘質土 (バイラン土を含む)
18. にぶい黄褐色砂質土 (砂質強い。よくしまる)
19. 灰黄褐色砂質土
20. 灰褐色砂質土 (山土粒を含む)
21. 灰白色粘質土
22. 灰褐色砂質土 (山土粒を含む)
23. 褐灰色砂質土 (山土粒を少量含む)
24. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒と炭化物粒を含む)
25. 灰黄褐色砂質土 (山土プロックと炭化物粒を含む。よくしまる)
26. 褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
27. 暗青灰色粘土
- II層 { 28. 褐色砂質土 (山土粒を含む。硬くしまる)
29. 褐色砂質土 (硬くしまる)
30. にぶい黄褐色砂質土 (山土プロックを含む。硬くしまる)
31. 褐色砂質土 (山土粒を含む)
32. 褐色砂質土 (バイラン土を含む)
33. 褐色砂質土 (山土プロックからなる。硬くしまる)
34. 褐色砂質土 (山土プロックからなる)
35. 褐色砂質土 (山土粒からなる)
36. 褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
37. にぶい黄褐色砂質土 (よくしまる)
38. 褐色砂質土 (よくしまる)
39. にぶい赤褐色砂質土 (山土粒を含む)
40. 褐色砂質土 (山土粒を含む)
41. 褐色砂質土 (山土粒を40層よりも多く含む)
42. 褐色砂質土 (山土粒を多く含む)
43. にぶい黄褐色砂質土
44. 褐色砂質土 (山土粒を多く含む)
45. 明褐色砂質土 (山土プロックからなる)
46. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒を含む)
47. 明褐色砂質土 (よくしまる)
48. 明褐色砂質土 (山土粒からなる)
49. 明褐色砂質土 (山土粒からなる)
50. 明褐色砂質土 (山土プロック含む。よくしまる)
- III層 { 51. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒と炭化物粒を含む。瓦・土師器を含む)
52. にぶい黄褐色砂質土 (山土プロックとバイラン土プロックを含む)
53. 褐色砂質土 (山土プロックからなる。よくしまる)
54. 褐色砂質土 (山土粒とバイラン土粒を含む。下面に麻土粒を多く含む)
55. 褐色砂質土
56. にぶい黄褐色砂質土 (バイラン土粒を含む。土師器含む)
57. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒を含む。土師器含む)
58. 褐色砂質土 (山土プロックを含む。炭化物粒を微量含む)
59. 黄褐色砂質土 (山土粒を多く含む。炭化物粒を微量含む)
60. 黄褐色砂質土
61. 灰黄褐色砂質土 (山土粒をやや多く含む)
62. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒と炭化物粒を含む。硬くしまる)
63. にぶい黄褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
64. 褐色砂質土 (山土プロックからなる)
65. にぶい黄褐色粘質土
66. にぶい黄褐色粘質土
67. 黄褐色砂質土 (山土プロックからなる)
68. にぶい黄褐色粘質土
69. にぶい黄褐色砂質土 (山土プロックを含む。よくしまる)
70. 黄褐色砂質土 (山土粒を多く含む)
71. 黄褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
72. 褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
73. 褐色砂質土 (山土粒を多く含む。よくしまる)
74. 黄褐色砂質土 (山土粒を含む。よくしまる)
75. 黄褐色砂質土 (山土粒からなる)
76. 黄褐色砂質土 (山土粒を75層よりも多く含む)
77. 黄褐色砂質土 (山土プロックからなる)
78. 褐色花崗岩/バイラン土
79. 赤褐色山土
80. 明黄褐色山土
- IV層 { 土坑 (17SK)
ピット (21SP)
ピット (22SP)
- V層 { 溝 (14SD)

図2 調査区土層断面図 (S = 1/80)

えられる。上面の標高は調査区東端で89.1m、調査区西端で88.3mである。

Ⅲ層は、褐色砂質土を主体とする。それぞれの層の厚さは約0.3mである。土質は山土を含み、硬くしまるのが特徴である。上面は東から西に段々になっているが、どの段階でこの形状になったのかは不明である。調査区東半ではほぼ水平である。溝（14SD）の掘り込み面である。Ⅳ層上面が上層遺構面（中世）であることから、中世の盛土と考えられる。上面の標高は調査区東端で88.9m、西端で87.5mである。

Ⅳ層は、にぶい黄褐色砂質土及び褐色砂質土を主体とする。土質からⅣ層はⅣ-1層（51～54層）Ⅳ-2層（55～60層）、Ⅳ-3層（61層）、Ⅳ-4層（62～68層）の4層に大別することができる。Ⅳ層上面は上層遺構面である。出土遺物には土師器・須恵器があり、瓦器は含まれない。それぞれの土層の共通性や出土遺物から、古墳時代から飛鳥時代の盛土と考えられる。主に調査区の西半に分布する。上面の標高は調査区中央で88.2m、西端で87.4mである。

Ⅴ層は、山土及びバイラン土からなる。地山である。一部を遺構により削平されているものの、東から西に低くなる。無遺物層である。上面の標高は調査区東端で89.1m、西端で86.4mで、本調査区の地形がもとは東から西へ下がる地形であったことは明らかである。

なお、本調査区の東側に広がる丘陵は大きく削平を受けており、耕作土の直下でⅤ層を検出したのみである。

以上より、本調査区における地形の成り立ちと変遷を検討する。本調査区は丘陵の端部に位置すると考えられる。特にⅤ層上面の形状に注目すると、本調査区東端では、削平を受けているにも関わらず、 $Y = -17,775.00$ 付近を境に東と西では、傾斜が異なることが分かる。つまり、 $Y = -17,750.00$ の西側は緩やかに東から西へ下る地形となる。本調査区における古墳時代以降の盛土による造成は、 $Y = -17,750.00$ ラインより西側の、傾斜が緩やかな地形に対して行われたと考えられる。

3. 検出遺構

古墳時代から飛鳥時代の盛土であるⅣ層上面及び地山であるⅤ層上面で遺構検出を行った。検出遺構の多くは、この2面が掘り込み面となっている。

上層遺構にはピット・土坑・溝があり、下層遺構にはピット・土坑・溝がある。

（上層遺構）

ピット（01～03・06～13・16SP）・土坑（05・17・20SK）・溝（04・14SD）がある。

ピット（01SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はなく、遺構間

の新旧関係もないため、時期は不明である。

ピット（02SP） 平面形は一辺0.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。掘方の底面に長軸0.2m、短軸0.1m、深さ0.1m未満の楕円形の凹みがある。土層断面にも柱抜き取り穴と考えられる土層（1層）があることから、柱穴と考えられる。出土遺物に土師器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。

ピット（03SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器があるが、細片で時期を特定できない。遺構間の新旧関係もなく、時期は不明である。

ピット（06SP） 平面形は長軸0.4m、短軸0.2mの楕円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器皿がある。出土遺物から、13世紀代の遺構と考えられる。

ピット（07SP） 平面形は直径0.4mの不整形円形を呈し、深さ0.2mを残す。埋土のうち、上層は人為的な埋土である。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、ピット（08SP）よりも古い遺構である。

ピット（08SP） 平面形は直径0.5mの不整形円形を呈し、深さ0.3mを残す。埋土は4層に分層できるが、いずれの層にも山土が含まれる点で共通する。出土遺物に須恵器があるが、細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、ピット（07SP）よりも新しい遺構である。

ピット（09SP） 平面形は長軸0.7m、短軸0.3mの不整形を呈し、深さ0.1mを残す。底面に焼土層があるが、焼土層からの遺物の出土はない。出土遺物に土師器があるが、細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも古い遺構である。

ピット（10SP） 平面形は一辺0.2mの隅丸方形で、深さ0.2mを残す。埋土は単層である。出土遺物に瓦器があるが、細片で器形や時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（11SP） 平面形は長軸0.3m、短軸0.2mの不整形で、0.3mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（12SP） 平面形は一辺0.2mの隅丸方形で、深さ0.3mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、溝（14SD）よりも新しい遺構である。

ピット（13SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形で、深さ0.3mを残す。埋土は単層である。出土遺物に土師器・須恵器・瓦器があるが、いずれも細片で時期を特定できない。

ピット（16SP） 平面形は直径0.2mの不整形円形で、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新

旧関係から、土坑（05SK）よりも古い遺構である。

土坑（05SK） 平面形は、東西1.2m、南北1.3m以上を残す不整形で、隅丸長方形の土坑の北辺に溝が取り付く。深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物には土師器・瓦器がある。出土遺物から、12世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、土坑（15SK）・溝（04SD）よりも古い遺構である。

土坑（15SK） 平面形は東西1.0m、南北0.7m以上の隅丸方形と考えられ、深さ0.4mを残す。埋土は粘質土が中心で、山土粒を含む層が多い。出土遺物に土師器・須恵器・瓦器がある。出土遺物から、12世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、土坑（05SK）よりも新しく、溝（04SD）よりも古い遺構である。

土坑（17SK） 平面形は東西0.6m、南北0.8m以上の不整形で、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物には平瓦がある。出土遺物から、飛鳥時代以降の遺構と考えられる。

土坑（20SK） 平面形は東西1.1m、南北1.4mの不整形で、深さ1.0mを残す。埋土は単層で、人為的な埋め戻し土である。出土遺物には土師器があるが、細片のため時期を特定できない。

溝（04SD） 平面形は「く」の字形で、南南東から北北西に向かって直線的にのび、西方向にほぼ直角に屈曲して西南西に直線的にのびる。規模は全長5.2m以上で、幅0.4m、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、土質は上層遺構面で検出した土坑やピットと類似する。流水の痕跡を示すラミナは認められない。出土遺物はない。遺構の新旧関係から、土坑（05・15SK）よりも新しい遺構である。

溝（14SD） 南南東から北北西に直線的にのびる。規模は全長4.6m以上で、幅3.1m、深さ1.5mを残す。埋土は最下層の27層が自然堆積土である以外は全て人為的な埋土である。埋土の堆積状況から、3回の掘り直し（12～16層・17～22層・23～26層）を確認できる。溝の壁面には、溝掘削時の工具痕が残存する。出土遺物には土師器・須恵器・瓦器がある。出土遺物から、13世紀後半の遺構と考えられる。遺構の新旧関係から、ピット（09SP）よりも新しく、ピット（10～12SP）よりも古い遺構である。

以上、上層遺構は本調査区全面で検出したものの、遺構間の関連性は明瞭でない。その中で斜面の裾に掘削された溝（14SD）は本調査地一帯における土地利用を考える上で重要な遺構である。

（下層遺構）

ピット（21～27・32・33SP）・溝（18・28・29SD）・土坑（30SK）がある。遺構は地山（V層）上面で検出したが、溝（28・29SD）及び土坑（30SK）は藤原京期以前の盛

土（IV層）中に掘り込み面を持つ。

ピット（21SP） 平面形は一辺0.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを残す。直径0.1mの柱痕跡があるため、柱穴と考えられる。出土遺物がなく、遺構間の新旧関係もない。地山であるV層上面が掘り込み面であるため、本調査地における盛土の開始時期よりも古い遺構と考えられる。

ピット（22SP） 平面形は東西0.5m、南北0.2m以上の隅丸方形と考えられ、深さ0.5mを残す。埋土は褐色もしくは黄褐色砂質土を主体とし、山土粒を含む点でピット（21SP）と共通する。出土遺物はない。ピット（21SP）と同様、V層上面が掘り込み面であるため、本調査地における盛土の開始時期よりも古い遺構と考えられる。

ピット（23SP） 平面形は直径0.2mの円形で、深さ0.2mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（24SP） 平面形は長辺0.2m、短辺0.1mの隅丸方形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層である。出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（25SP） 平面形は長軸0.3m、短軸0.2mの不整形円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（26SP） 平面形は直径0.2mの不整形円形を呈し、深さ0.2mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（27SP） 平面形は長軸0.2m、短軸0.1mの不整形円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（32SP） 平面形は直径0.2mの不整形円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

ピット（33SP） 平面形は直径0.3mの不整形円形を呈し、深さ0.1mを残す。埋土は単層で、出土遺物はない。遺構の新旧関係もないため、遺構の時期は不明である。

溝（18SD） 南南東から北北西に直線的に延びる。全長3.3m以上で、幅3.7m、深さ1.2mを残す。断面形は緩やかなV字状である。埋土は34～38層、39～44層、45・47・48層、46・49・50層の4層にまとめることができ、埋没の過程で3度の掘り直しが想定できる。出土遺物に土師器・須恵器がある。土師器はいずれも細片である。須恵器には壺（図12 - 24）と甕（図12 - 25）がある。遺構の新旧関係はない。出土遺物から藤原京期の遺構と考えられる。

溝（28SD） 南東から北西に弧を描く。全長2.5m以上で、幅0.6m、深さ0.3mを残す。断面形は逆台形である。埋土は人為的な埋め土で、2層に分かれる。出土遺物はない。IV - 4層上面が遺構掘り込み面である。遺構の新旧関係から、溝

(29SD) よりも古い遺構である。

溝(29SD) 南南東から北北西に直線的にのびる。全長1.5m以上で、幅1.0m、深さ0.3mを残す。断面形は逆台形である。埋土は人為的な埋め土で、3層に分かれる。出土遺物は坏蓋(図12-21)がある。IV-4層上面が遺構掘り込み面である。出土遺物から古墳時代中期後半の遺構である。遺構の新旧関係から、溝(28SD)よりも新しい遺構である。

土坑(30SK) 調査区内では遺構の北半を検出した。土層断面から、調査区壁の中に収まると考えられる。規模は長軸0.7m、短軸0.2m以上を残すが、本来は長軸0.7m、短軸0.4mほどの不整楕円形と考えられる。埋土は明褐色砂質土及び褐色砂質土を主体とする。出土遺物はない。遺構の新旧関係はないが、藤原京期以前の盛土であるIV-1層もしくはIV-2層上面が遺構掘り込み面である可能性が高いことから、飛鳥時代の遺構と考えられる。

なお、上層遺構と下層遺構の間の盛土(IV層)は2。調査の方法と層序でも述べた通り、大きく4層にまとめることができる。盛土中からは、土師器や須恵器、割石が出土している。個別の層からの出土遺物としては、IV-1層から須恵器蓋(図12-22)、IV-2層から割石(図12-26)、IV-3層から須恵器坏G(図12-23)が出土している。出土遺物や遺構の新旧関係から古墳時代中期後半から飛鳥時代の盛土と考えられ、盛土を行った時期は藤原京期が中心と考えられる。

以上、下層遺構は少ないものの、地形との関連性が想定される溝(18SD)や、盛土の上限を示唆する可能性のある溝(28・29SD)など、本調査地における開発を考えるうえで重要な遺構がある。

4. まとめ

本調査では、2面の遺構面を確認し、中世及び古墳時代から藤原京期にかけての遺構を検出した。検出遺構は少なかつたものの、いずれの遺構面も地形との関わりを考える上で重要である。そこで本調査地における遺構変遷と地形の関係をまとめる。

遺構変遷

本調査地において遺構が確認されるのは、古墳時代中期後半である。この時期には、まだ斜面地の盛土造成は行われていないようで、主要な遺構は溝(28・29SD)程度である。その後、藤原京の造営に伴い、斜面地の盛土造成が行われる。しかし藤原京期と判断できる遺構は、溝(18SD)や土坑(30SK)に限られる。藤原京期以降も盛土による平坦地の造成は続き、平安時代末期及び鎌倉時代には溝(04・14SD)や土坑(05・15・20SK)といった遺構が確認される。

以上、本調査地における土地利用は古墳時代中期末に始ま

り、藤原京期、平安時代末期及び鎌倉時代に盛んになる。

地形と遺構の分布

本調査地における最も重要な遺構は、溝(14・18SD)である。この2条の溝は共に丘陵の先端部に掘削され、何度も掘り直されている。つまり溝(14・18SD)は、丘陵から流れ落ちる雨水の排水溝としての役割を担ったと考えられる。

しかし、盛土によって造成された平坦面の利用方法は、今のところ不明と言わざるを得ない。また藤原京期には、本調査地の南に阿倍山田道が通っているが、溝(18SD)や整地と阿倍山田道との関係も不明である。とはいえ、阿倍山田道が飛鳥時代において重要な道路であった事を考慮すれば、阿倍山田道に隣接する斜面地である本調査地の造成は、阿倍山田道沿いの谷地形を盛土によって埋め、道路に面する平坦面を少しでも多く造り出すという意味では、非常に重要である。

また、溝の掘り直しが繰り返し行われている点は、溝の西側における土地利用に大きな変化がなかった事を示すのではないだろうか。鎌倉時代においても藤原京期の溝(18SD)とほぼ同じ場所に溝(14SD)を掘削している点はこれを補強するといえる。

一方、本調査の課題として、古墳時代及び藤原京期における本調査地の西側に広がる谷地形の利用方法の解明が挙げられる。本調査における課題は、これらの点を視野に入れつつ、今後の調査成果を踏まえながら解明すべき課題といえよう。

(松井一晃)

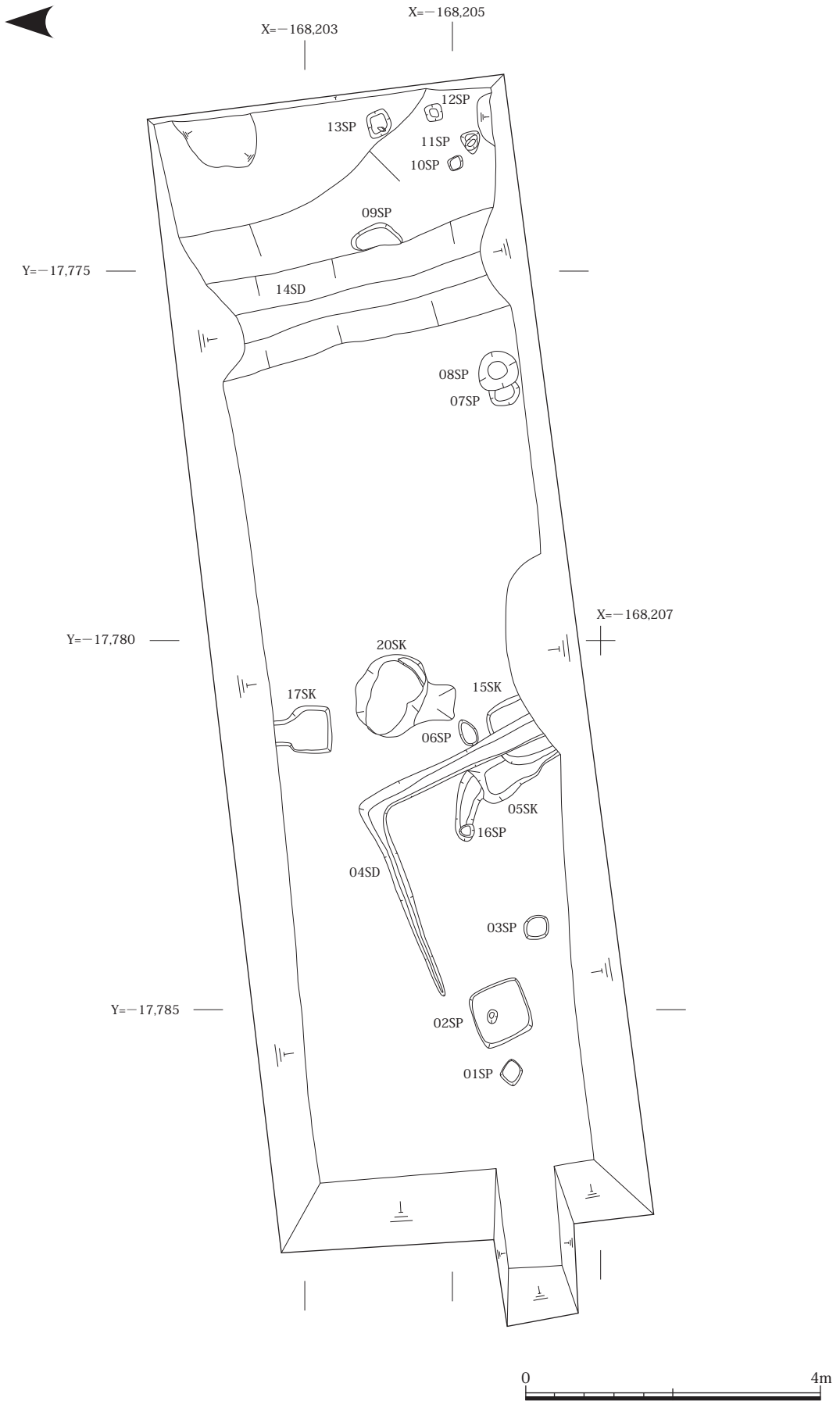


図3 上層遺構平面図 (S = 1/80)

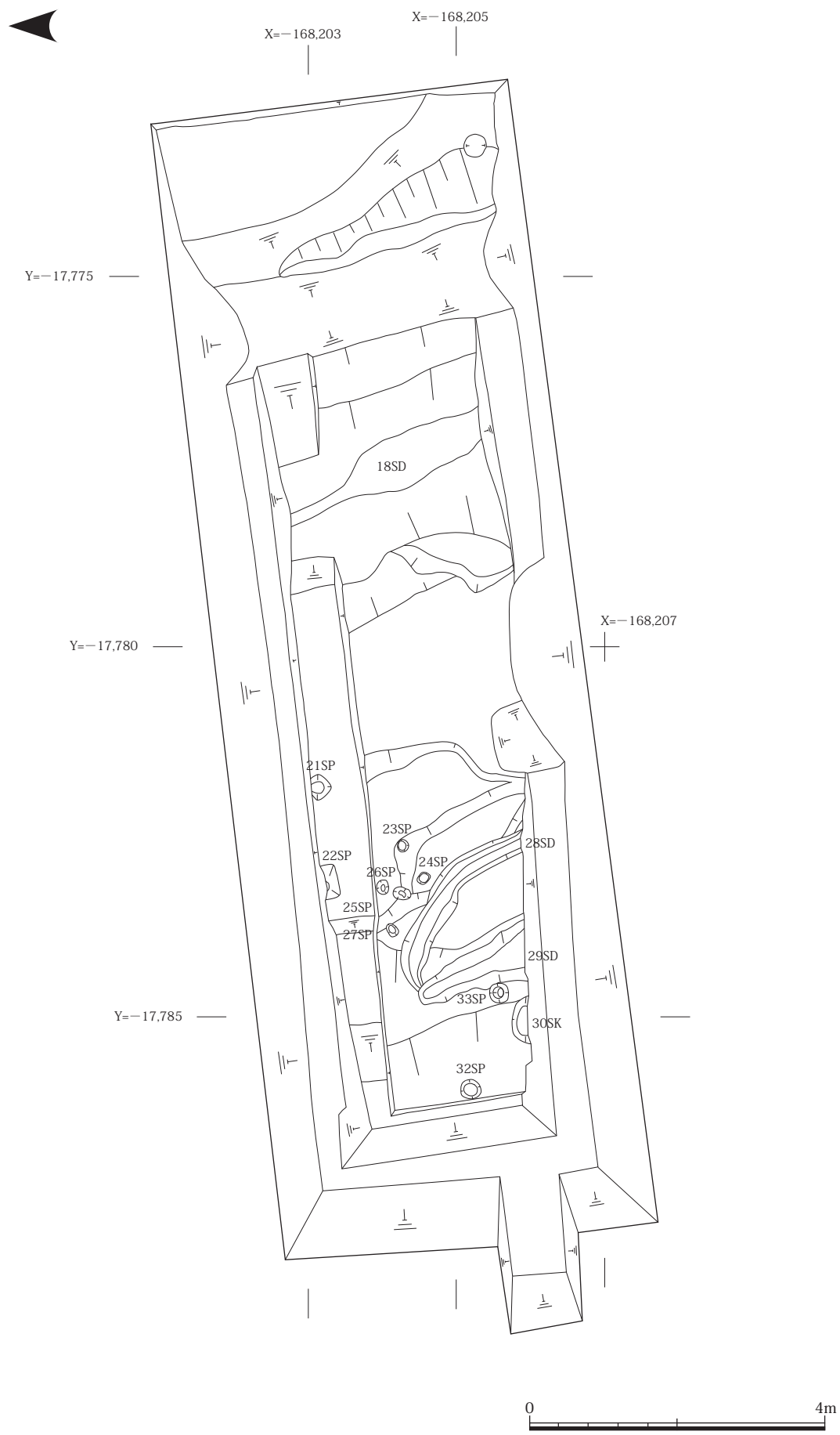


图4 下層遺構平面図 (S = 1/80)



写真1 上層遺構検出状況（西から）



写真2 上層遺構完掘状況 - 西から -



写真3 溝(14SD)完掘状況 - 北西から -



写真4 溝(14SD)土層断面 - 南東から -



写真5 下層遺構検出状況 - 西から -



写真6 下層遺構完掘状況 - 西から -



写真7 調査地から阿倍山田道方面を望む - 北東から -



写真8 調査区西半の整地土断面 - 南から -

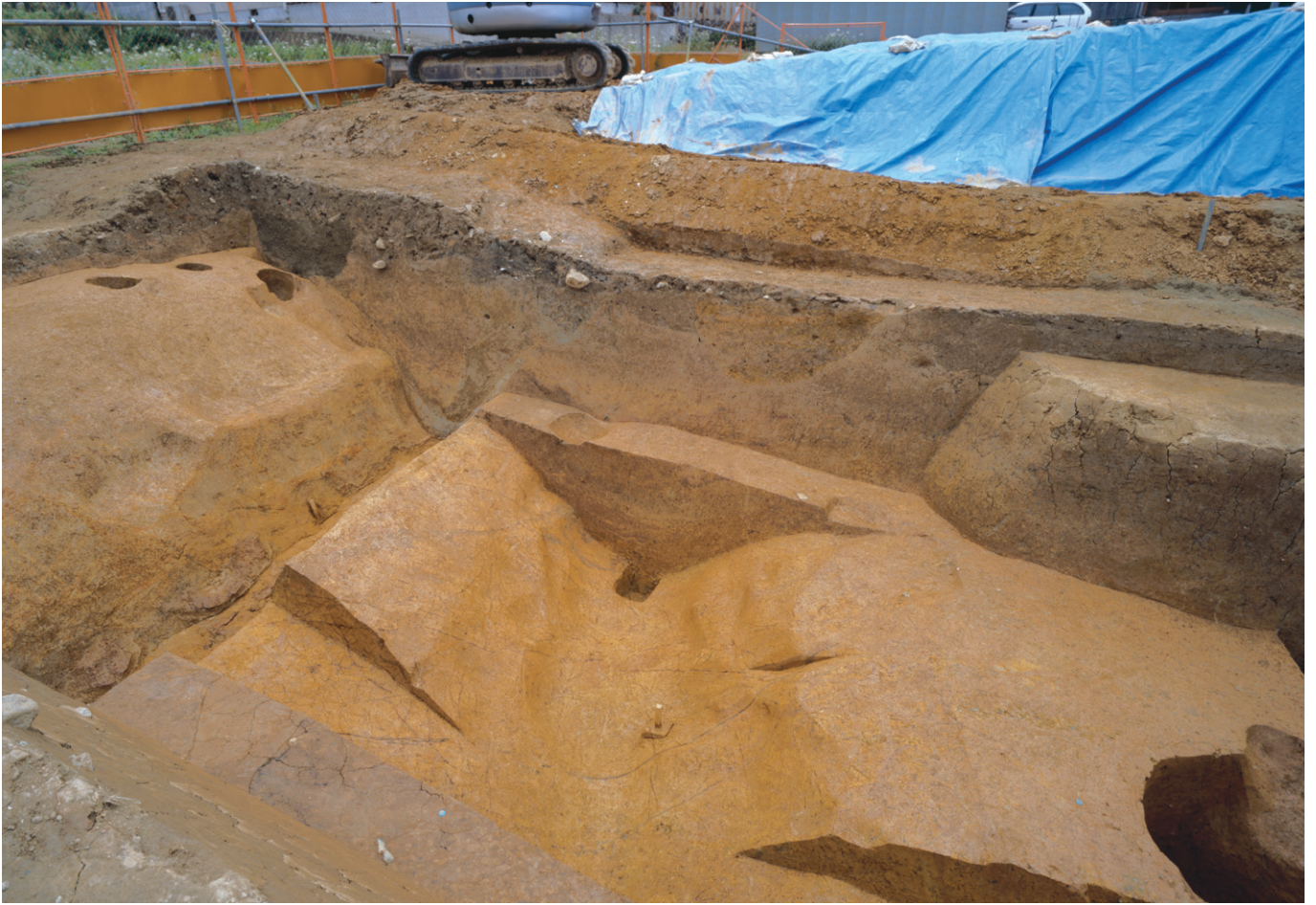


写真9 溝(18SD)完掘状況 - 北西から -

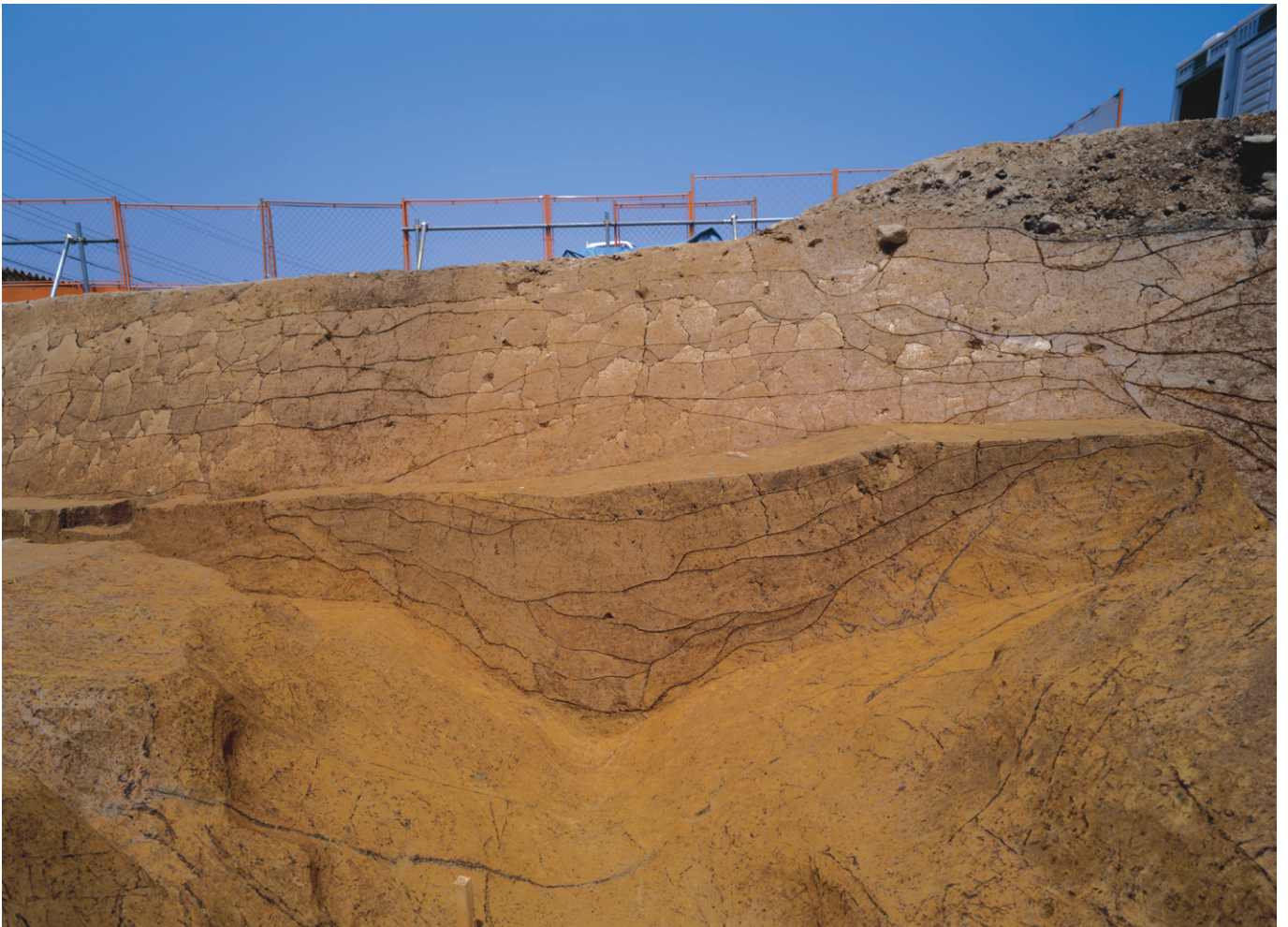


写真10 溝(18SD)土層断面 - 南東から -

大藤原京左京一・二条六・七坊 黒田池遺跡

調査地 膳夫町・出垣内町地内

調査期間 平成 24 年 4 月 16 日～平成 24 年 6 月 1 日

調査面積 365.0 m²

調査原因 店舗建設

1. はじめに

調査地は榎原市の東端部、J R 桜井線香久山駅から南に約 250 m の地点に位置する荒蕪地である。調査地の東隣には黒田池が所在し、池より東は桜井市域である。

調査地は藤原京の条坊復元では大藤原京左京一・二条六・七坊にあたる。東六坊大路は調査地の中央、一条大路は調査地の北半をそれぞれ通る。また、調査地は縄文時代～古墳時代の集落跡・遺物散布地である黒田池遺跡の範囲にも含まれる。調査地東隣の黒田池の底面付近では石器や各時期の土器が採取されている。

本調査に先立ち、平成 23 (2011) 年 2 月 17 日に試掘調査を実施した。建物予定地点である敷地北半部の 3 ケ所に試掘調査区を設定し、それぞれの調査区で遺構の存在を確認した。遺構面の標高は、調査地周辺の地形と同様、南東から北西に向かって低くなる。その後、試掘調査の結果を受けて設計変更が行われ、建物の大半の範囲について遺構の保護がなされた。遺構面の標高が高い建物南東隅部分については、遺構の保護が困難であるため本調査を実施することとなった。また、敷地北西隅に埋設される大型浄化槽部分についても同様である。

2. 調査の概要

敷地北半部の 2 ケ所に調査区を設定している。調査区の名前は、建物南東隅部分の調査区を 1 トレンチ、敷地北西隅の浄化槽部分の調査区を 2 トレンチとする。面積は 1 トレンチが 255.0 m²、2 トレンチが 110.0 m² である。両調査区は建物の形状にあわせて、わずかに西で南に振れる形状である。

両調査区は直線距離にして約 65 m 離れている。一条大路と東六坊大路の交差点はちょうど両調査区の間付近に位置すると想定され、1 トレンチは左京二条七坊西北坪、2 トレンチは左京一条六坊東南坪にあたる。

以下に調査区ごとに成果の概要を述べる。

○ 1 トレンチ

1 トレンチの基本層序は以下のとおりである。

I 層：現代造成土 (上面の標高 72.4 ～ 72.7 m。厚さ 0.9 ～ 1.1 m)

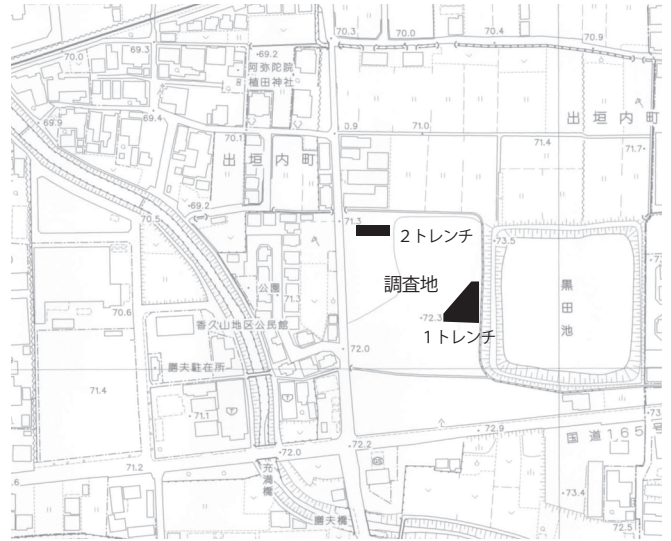


図5 発掘調査区位置図 (S=1/5,000)

II 層：青灰色粘質土 (旧耕土。厚さ 0.1 ～ 0.3 m)

III 層：暗緑灰色粘質土 (床土。厚さ 0.05 ～ 0.15 m)

IV 層：褐灰色砂質土 (中世以降の耕作層。厚さ 0.05 ～ 0.15 m。調査区南半のみ)

V 層：浅黄色シルト・黄橙色微砂・灰褐色細砂・灰白色微砂・灰色粘土 (古代より前の河川堆積層。上面の標高 71.2 ～ 71.3 m)

VI 層：黒褐色シルト質粘土・青灰色粘土 (縄文時代の堆積層。上面の標高 69.8 m。調査区中央のみで確認)

V 層上面で遺構を検出している。遺構の時期は中世と藤原京期に分かれ、いずれも V 層上面から掘り込まれている。なお、調査区中央には II 層上面から掘り込まれた現代の野井戸がある。野井戸の掘削は壁面の崩落の恐れがあるため、調査工程上の必要に応じて部分的に掘削を行うに留めている。

中世の遺構には、素掘り耕作溝がある。耕作溝は東西方向と南北方向とがあり、南北方向の溝が古い。南北方向の溝は数量が少なく、深さ約 0.2 m の溝がわずかに残る。東西方向の溝は南北方向よりも数量が多いが、約 0.1 m 未満の深さが多い。溝の数量は調査区西半が多く、東半が少ない。

藤原京期の遺構には、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットがある。

1103SB は調査区南東部に位置する柱間 3 × 2 間以上の掘立柱建物である。規模は桁行 3.0 m 以上・梁間 3.3 m である。調査区南東隅付近は攪乱によって周囲よりも遺構検出面が低くなっており、建物東辺北から二つ目の柱穴は削平されていると考えられる。

1044SE は平面円形の井戸である。遺構の北側半分は野井戸によって破壊されている。当初の平面規模は抜き取り穴や攪乱により不明であるが、直径約 3 m 程度であると想定される。深さは 1.9 m。東側には直径約 2.8 m の抜き取り穴がある。井戸枠は大半が持ち去られており、抜き取り穴の埋土下層から少

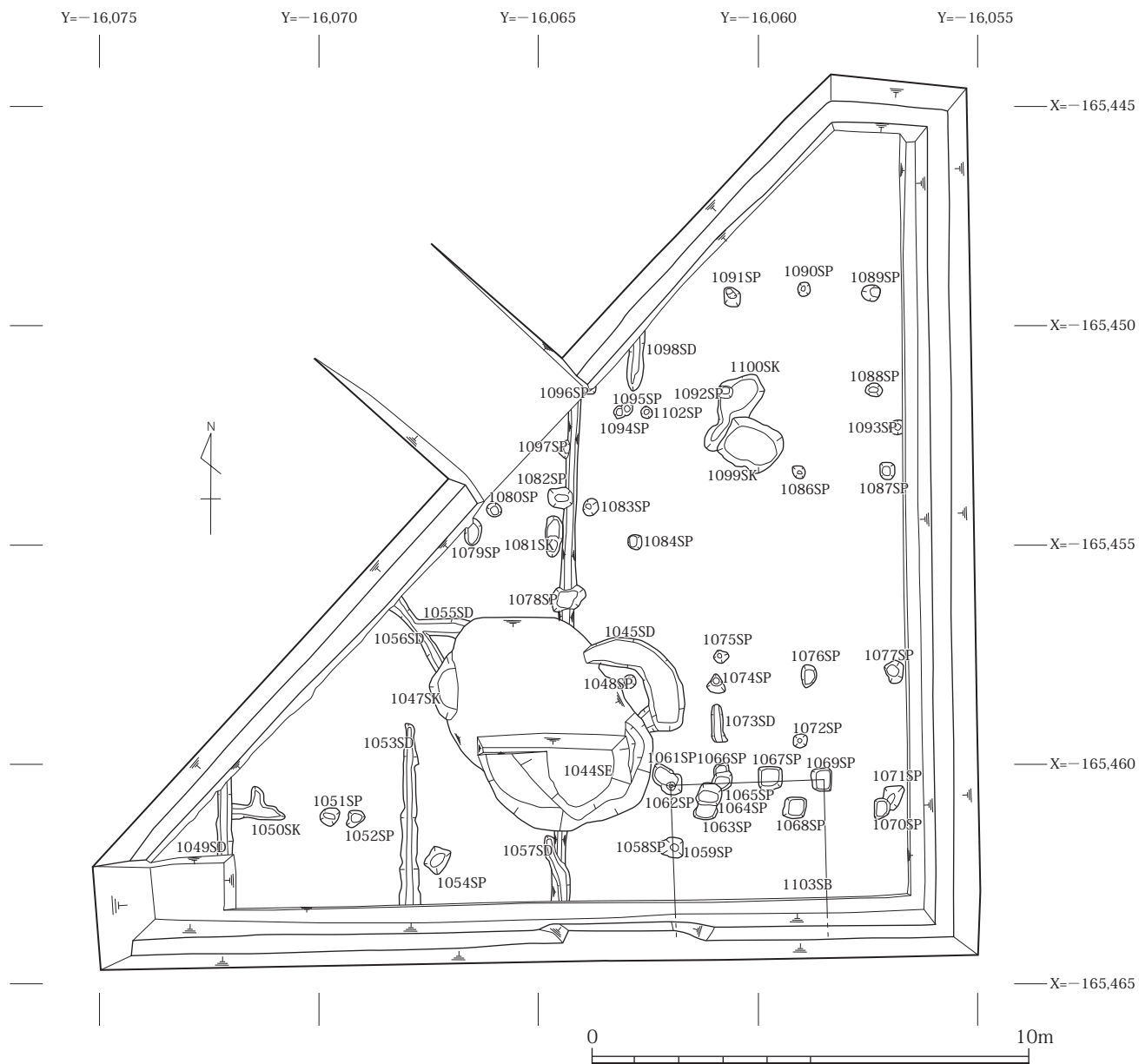


図6 1 トレンチ下層遺構平面 (S=1/150)

量の木材が出土している。抜き取り穴は人為的に埋め戻されている。

土坑は5基ある(1047・1050・1081・1099・1100SK)。1047SKは直径1.5m以上、深さ0.5mを測る。遺構の東側が削平されているため全体像は不明であるが、大型の土坑であると考えられる。1050SKは深さ0.05mの小規模な土坑である。1081・1099・1100SKは深さ約0.2mの楕円形土坑である。1100SKからは土師器の坏が出土している。

1045SDは調査区中央に位置するコの字状の溝である。断面の形状はU字状を呈し、深さ0.75mを測る。溝の側面がほぼ垂直に切り立つ特徴的な溝である。1044SEの抜き取り穴は1045SDの埋土上層を掘り込んでいる。1049・1053・1073・1098SDは南北方向、1055SDは東西方向、1056・1057SDは南東-北西方向の溝である。それぞれ幅約0.3～0.5mを測る。

この他、調査区全体でピットを確認している。密度は調査区

南東部がもっとも高い。1103SB以外にも建物や塀が存在していると考えられる。

VI層は1044SE底面付近の遺構壁面でのみ確認している。VI層および1044SEの下層埋土からは縄文時代後期の土器が出土している。

古代以降の遺構基盤層であるV層は縄文時代から古代までに堆積した河川堆積層であると考えられるが、遺物が出土しておらず、具体的な時期は不明である。

○2 トレンチ

2 トレンチの基本層序は以下のとおりである。

- 1層：現代造成土 (上面の標高71.4～71.5m。厚さ0.5～0.6m)
- 2層：緑灰色粘質土 (旧耕土。厚さ0.2～0.4m)
- 3層：浅黄色土・灰黄褐色土 (床土。厚さ0.05～0.15m)

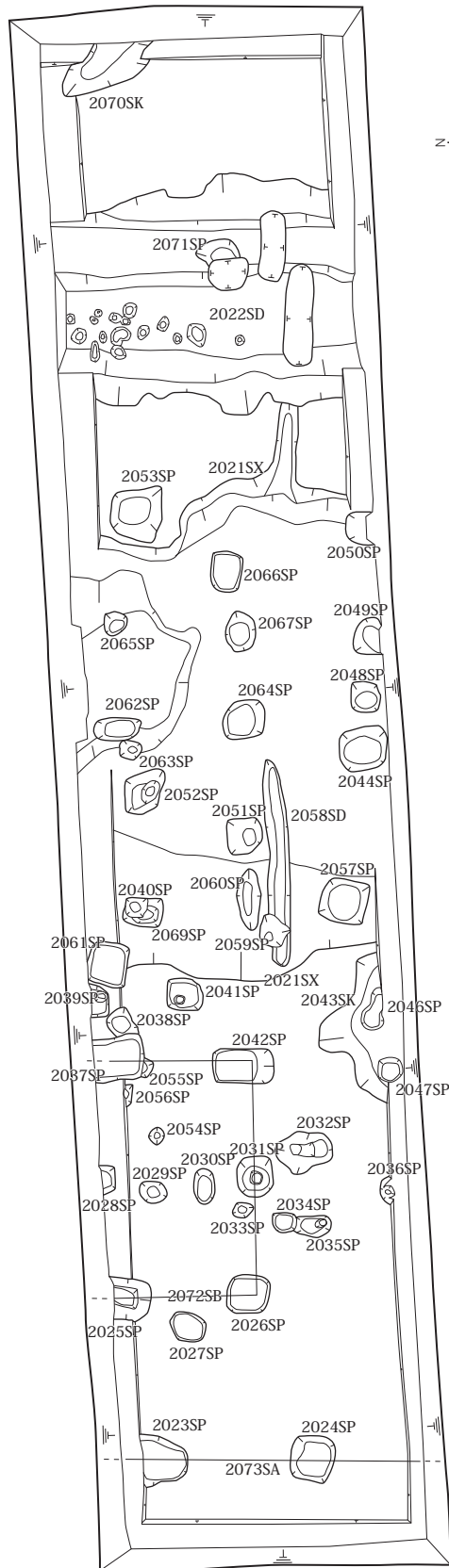


図7 2トレンチ下層遺構平面 (S=1/100)

4層：浅黄色粘質土・灰黄色粘質土（中世以降の耕作層。厚さ0.05～0.20m）

5層：褐灰色砂質土（藤原京整地層。上面が遺構面。上面の標高70.6m。厚さ0.05～0.10m。調査区中央のみ）

6層：褐灰色砂質土・黒褐色微砂質土・褐灰色微砂質粘土・灰黄色シルト（古代より前の河川堆積層。上面の標高70.5～70.6m。厚さ0.3～0.8m以上。調査区西側ほど厚い）

7層：黄色粘質土（地山。上面が縄文時代遺構面。上面の標高70.5m。調査区東端のみ）

5・6層および7層の上面で遺構を検出している。遺構の時期は中世、藤原京期、縄文時代に分かれる。

5層は藤原京の整地層で調査区の中央付近（2043SK西肩～2021SX東肩の付近）に薄く広がっている。古代以降の遺構は5層および6層上面で検出している。

5・6層上面での調査後、7層まで人力で掘削を行い、遺構の確認を行った。7層上面では縄文時代の遺構を検出している。7層は調査区東端付近にのみ存在し、上面は西に向かって急速に落ち込んでいく。6層は縄文時代から古代までの堆積層であるが、遺物が出土しておらず、詳細な時期は不明である。

中世の遺構には、素掘り耕作溝がある。

耕作溝は東西方向と南北方向とがあり、南北方向の溝が古い。南北方向の溝は数量が少なく、深さはいずれも0.1m未満である。東西方向の溝は南北方向よりも数量が多く、調査区全体に存在する。深さは最大で約0.3mを測る。

藤原京期の遺構には、掘立柱建物・塀、土坑、溝、落ち込み、ピットがある。

2072SBは柱間2×1間以上の掘立柱建物である。規模は桁行1.5m以上・梁間3.3mである。南北棟の側柱建物であると考えられる。

2073SAは約2m間隔で南北に並ぶ3基の柱穴である。ここでは塀としているが、大型の建物の一部である可能性もある。

2043SKは5層上面から掘り込まれた不整形の土坑である。東西約2.1m、南北1.2m以上、深さ0.2mを測る。埋土には炭化物が多く含まれ、土師器・須恵器が出土している。

2022SDは南北方向の溝である。幅2.5～2.7m、深さ0.55mを測る。西側で掘り直しが行われている。藤原京期の土器が出土している。溝の西側底面には直径

0.05～0.15 mの不整形なくぼみが多数存在する。

2085SDは長さ3.2 m、幅0.3 m、深さ0.2 mの東西方向の溝である。

2021SXは調査区中央部に位置する落ち込みである。深さは0.1～0.4 mで、北端と南端が深くなる。時期は整地層(5層)よりも古いが、整地層やその上面の遺構と同様の遺物が出土し、埋土も整地層に近い。整地以前の地形の窪みである可能性が考えられる。

この他、ピットを多数確認している。ピットの分布範囲は2022SDよりも西側に限られる。

縄文時代の遺構には土坑とピットがある。

2070SKは調査区北東隅に位置する土坑である。深さ0.5 mを測る。縄文土器、サヌカイト片が出土しており、埋土には炭化物が多く含まれる。

2071SPは直径0.5 mの円形のピットである。深さは0.3 mを測る。2022SDの下面で検出している。遺物は出土していないが、層序や埋土が2070SKと共通する点から、縄文時代の遺構であると考えられる。

3. まとめ

両調査区において藤原京期の遺構を確認することができた。調査地一帯は大半が河川由来の堆積層からなるやや軟弱な地盤であるが、藤原京の時代には広く宅地としての利用が行われていたようである。2トレンチではその時期の整地層の存在を確認している。1トレンチは遺構の残存状況などから、2トレン

チよりも後世の耕作による遺構面の削平が進んでいると考えられ、当初は1トレンチ帯にも整地が行われていた可能性もある。

条坊道路に関わる可能性がある遺構としては、2トレンチの南北溝2022SDが挙げられる。2022SDはその位置から、東六坊大路の西側溝である可能性をもつ。これまで東六坊大路の確実な検出例はない。そのため、調査地近辺での東四坊大路(中ツ道)や東五坊坊間路の検出例(榎教委2003-2次調査・榎教委1999-2次調査)から東六坊大路の位置を推定すると、一・二条付近における東六坊大路の中軸線は $Y=-16,098.0$ m(※世界測地系)付近であると考えられる。2022SDの中心線は $Y=-160,115.0$ mであり、東六坊大路推定中心線から西に17 mの距離にあたる。これは一般的な偶数坊大路の規模(側溝芯々間距離で16 m前後)とは離れた値である。2022SDの機能としては他に、東六坊大路西側溝のやや西に掘られた区画溝である可能性が挙げられる。確定については周辺での今後の調査に期待したい。

2トレンチでは縄文時代の遺構・遺物を確認している。1トレンチでも古代の遺構面から約1.5 m下層に縄文土器が含まれることを確認している。得られた情報は断片的ながら、縄文時代に調査地周辺で生活が営まれていたことは確かである。

なお、本調査の詳細については当教育委員会発行『榎原市埋蔵文化財調査報告 第7冊 藤原京跡Ⅲ・黒田池遺跡』(2013年3月発行)で報告を行っている。

(石坂泰士)



写真11 1044SE検出状況 - 南から -



写真12 1トレンチ 下層遺構検出状況 - 南東から -



写真13 1トレンチ 遺構完掘状況 - 南東から -



写真14 1044SE土層断面 - 北東から -



写真15 1044SE完掘状況 - 東から -



写真16 2トレンチ 遺構完掘状況 - 東から -



写真17 2021SX検出状況 - 北から -



写真18 2022SD完掘状況 - 北から -

史跡 植山古墳

調査地 五条野町地内

調査期間 平成 24 年 7 月 26 日～平成 25 年 2 月 28 日

調査面積 1200.0 m²

調査原因 範囲確認調査

1. はじめに

調査の主な目的は、両石室の開口部を含む墳丘前面および古墳前庭部の状況確認である。

今回の調査地点は、墳丘前面斜面および墳丘南側に広がる平坦地である。2000～2001 年度の調査時には、墳丘のすぐ南隣が住宅であったため、調査を行う事が出来なかった地点である。その後、史跡公園整備に向けて墳丘南側の平坦地の用地買収を進め、2012 年に同地点の発掘調査を行うこととなった。

墳丘南側の平坦地の広さは東西約 30 m、南北約 35 m である。うち西半部は宅地、東半部は竹林であった。竹林部分については 2001 年に部分的な発掘調査を行っている。今回の調査では 2001 年調査区の再掘削を行っている。調査前の地面は、東の竹藪面が西の宅地面より 0.8～1.5 m 高くなっている。また、全体に北側が南側より一段高くなっている。

2. 調査の方法と経緯

調査の方法は橿原市史跡等調査保存整備検討委員会（以下、委員会）に調査計画の事前説明を行い、委員会の指導のもと具体的な方法を決定した。2012 年 10 月 11・15 日、11 月 6 日には委員会による発掘調査現地指導を受けている。

調査はまず墳丘裾および前庭部の状況を確認するため、平坦地東側に調査区を設定した（1・2 トレンチ）。これは現況地盤高が高い東側のほうが、遺構が遺存する可能性が高いと判断したためである。続いて 9 月後半から墳丘前面の調査に取り掛かった。墳丘前面には竹木が多数生えており、これらを重機で除去した後、人力で遺構の検出作業を行った。石室周辺には以前から遺構保護のための覆屋を設置しており、必要に応じて解体を行いつつ調査を進めた。11 月中旬からは覆屋全体の解体を行い、並行して平坦面南半の調査を行った（3 トレンチ）。平坦面西半（4・5・6 トレンチ）については、墳丘前面の調査が概ね終了した 12 月後半に行った。この後、両石室前面の斜面を含む形で遺構保護の覆屋を再設置した。平坦地の調査区については重機で埋め戻しを行った。

2012 年 12 月 15 日（土）には現地説明会を行い、955 人の見学者を得た。当日は今回の調査地点である墳丘前面および前庭部の公開に加え、墳丘上から覗き込む形で両石室の公開も



図8 発掘調査地と周辺の飛鳥時代の遺跡（S=1/5,000）

行った。

覆屋再設置中の 2013 年 1 月 15 日、西石室東壁の 1 石が崩落するき損事故が発生した。崩落石は闕石南東隅に接触しており、闕石の表面に軽微な擦傷が生じている。1 月 18 日の委員会による崩落状況の現地確認を経た後、1 月 21 日に重機によって崩落石を移動させた。き損事故については、1 月 25 日付で文化庁長官にき損届を提出、2 月 12 日に報道発表を行った。

3. 調査成果

墳丘前面の調査

墳丘前面は、宅地造成により大きく削平を受けており、西側ほど奥（北）に削り込まれている。当初の墳丘前面裾は完全に削平されてしまっており、墳丘前部を輪切りにした土層断面が確認できる状態になっている。両石室の床面は高さ約 7 m の斜面の中段に位置する。本来は羨門にいたる墓道がさらに南に続いていたはずであるが、削平されてしまっている。両石室ともに羨門から南に約 3 m までの範囲が遺存している状態である。

調査は、墳丘前面斜面に堆積している厚さ 0.1～0.8 m の表土（概して上部が厚い）を除去して遺構の検出を行っている。並行して 2000 年度調査で掘削した両石室羨門より南側の土層の再検討を行い、各層序の機能の把握を行っている。層序は大きく、後世の堆積土、石室閉塞土、石室・排水溝構築土、墳丘（盛土・地山）に分けられる。

後世の堆積土

石室石材の上半は後世に取り去られており、両石室の前面上部において石材取り去り時の掘削部分に堆積した土層を検出している。石材取り去りの時期は不明である。取り去り時の掘削は、東石室前面では床面から約 1.2 m の高さまで、西石室前面



図9 墳丘前面平面図 (S=1/300)

では床面にまで及んでいる。西石室西半の後世の堆積層については、石室壁面保護のために掘り下げを行わず、保存している。

石室閉塞土

東・西の石室の開口部が盛土（閉塞土）によって閉塞されていることを確認している。閉塞後は外部から石室入口（羨門部）が完全に見えなくなっていたと考えられる。

東石室では、閉塞土が羨門部から墳丘前面東側にかけての非常に広範囲を覆っている。範囲は高さ約4m・奥行（南北）約4m・幅（東西）約10mに及ぶ（いずれも残存長）。東石室閉塞土は主として褐灰色砂質土と橙色砂質土からなる。

西石室においても閉塞土を検出しているが、大部分が後世に削平されてしまっており、奥行（南北）約0.8mの範囲がわずかに残されているのみである。西石室の閉塞土は二段階に分かれる。先に盛られている西石室閉塞土①は橙色土からなり、開口部中央より東側に広がる。①の後に盛られている西石室閉塞土②は橙色・灰色粘土からなり、開口部中央付近にわずかに残存する。閉塞土①と②は、閉塞作業の工程差であるのか、①で閉塞したのち再度入口を開口させて新たに②で閉塞を行ったという时期的な差であるのかは不明である。

閉塞時期については、東石室閉塞土が西石室閉塞土①より後に盛られており、いずれも西石室築造の7世紀前半以降であると考えられる。東石室の築造は6世紀末であり、この盛土による閉塞以前にも何らかの方法で石室を閉塞していたと考えられるが、その痕跡は検出されず具体的な方法は不明である。

東石室では羨道延長線上に、閉塞土をU字状に掘り込んだ通路状遺構を検出している。通路状遺構は上幅約1.4m、深さ約0.5mを測り、上部は後世に削平されている。通路状遺構は人為的に埋め戻しが行われている。遺物は出土せず、詳細な時期や用途は不明である。

石室・排水溝構築土

東石室前面では、墳丘盛土を掘り込んで排水溝を構築していることを確認している。床面より上には閉塞土が遺存しているため、排水溝構築の掘り込みが墳丘構築のどの時点において行われたかは確認できない。排水溝は少なくとも羨門部より南では暗渠構造になっている。東石室排水溝は新・旧二段階が存在する。羨道内ではこれらが一体となってひとつの排水溝を構成しているが、墳丘前面では両者の軸がずれ、独立して存在している。排水溝（新）は、石室床面から新たに掘り直しを行って構築されている。排水溝（新）が造り足された時期は不明である。残存している排水溝の先端部約1mの範囲は、削平された斜面の傾斜に沿って石材が崩落している。

西石室前面では、西石室構築に伴うと考えられる墳丘上部からの掘り込みを確認している。排水溝は一度床面まで盛土を

行った後、新たに掘り込みを行って構築されている。排水溝は東石室同様、少なくとも羨門部より南では暗渠構造である。

墳丘

地山および盛土の断面を確認し、墳丘構築の過程が明らかになっている。

古墳築造以前の地山面は、西石室前面付近が谷状にやや窪んでいる。墳丘構築にあたり、墳丘中軸付近より西側では、旧来の地形を大きく改変する事なく盛土を施している。一方、中軸より東側では地山を一度岩盤まで掘削し、平坦な面を形成した跡に盛土を施している。西石室前面付近では、岩盤を削り出したと考えられる盛土を平坦面の高さに合わせるように施している。この平坦面上には炭化物を含む黄橙色粘土層が水平に広がっている。平坦面の高さはおおむね東側周壕底と一致する。

墳丘盛土は主として 橙色・黄橙色・黄灰色の粘質土～砂質土からなる。墳丘の核にあたる中軸付近は盛土の単位が非常に細かく、厚さ約0.05～0.15mの盛土を水平に重ねている。その一方、墳丘西側は中軸付近よりも粗い単位の盛土で構築されている。墳丘西辺部では地山を逆L字に一度掘り込んだ後に盛土を施し、西側斜面を構築していることを確認している。墳丘盛土内からは阿蘇溶結凝灰岩の小片が出土している。

墳丘南側平坦地の調査（1～6トレンチ）

南側平坦地では、古墳に伴うと考えられる整地層を検出している。後世に削平された部分もあるが、整地層は平坦地のほぼ全面に広がっていたと考えられる。

平坦地北側一帯は、後世の耕作や宅地確保などの土地改変によって、墳丘および整地層が大幅に削平されている。現墳丘裾から南に約6～14mまでの範囲は表土ないし耕作土の直下で地山を検出している。現況の平坦な地形は、中世以降の土地改変によって形成されたものである。平坦地南西部では中世および近世に大規模な盛土造成が行われている。また、平坦地東側の高台も近世以降の盛土によって形成されている。

整地層の上面は北から南に向かって低くなる。平坦地北半では現況 - 0.3m前後の深度で整地層ないし地山が検出される一方、平坦地南西端（3・5トレンチ）においては現況 - 2.1m前後で整地層が検出される。平坦地南半では当初の整地層面の傾斜を概ね残していると考えられる。一方、平坦地北半は大幅に削平されてしまっており、南半の傾斜する整地層面から石室入口への通路（墓道）がどのような形であったのかは不明である。なお、東側一帯（2トレンチ）の整地層面は、西側一帯（3・5・6トレンチ。石室前面の延長線上にあたる）よりも高くなっている。南端付近（3トレンチ南側）では東から西に向かって整地面が低くなることを確認している。

整地層上面がもっとも低くなる南西隅と現墳丘頂とでは約

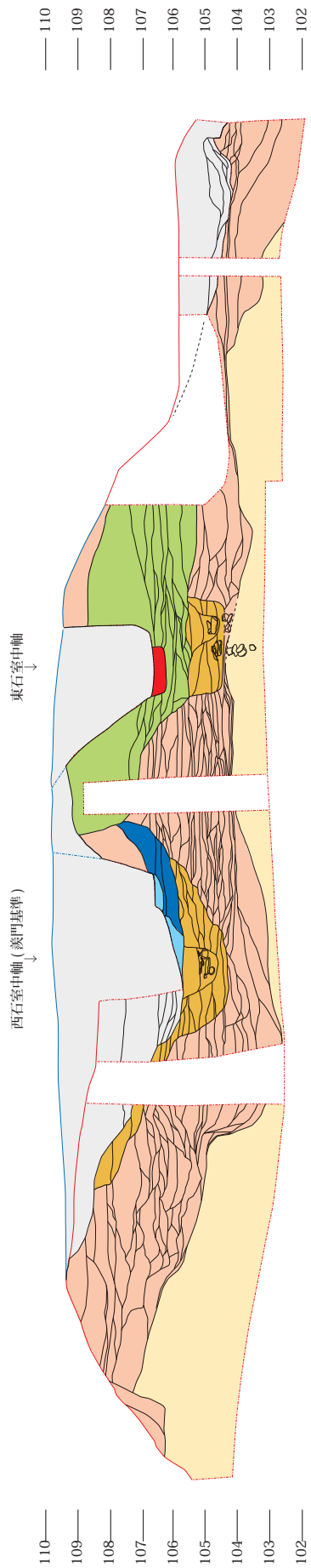


図10 墳丘前面 立面図 (S=1/200)

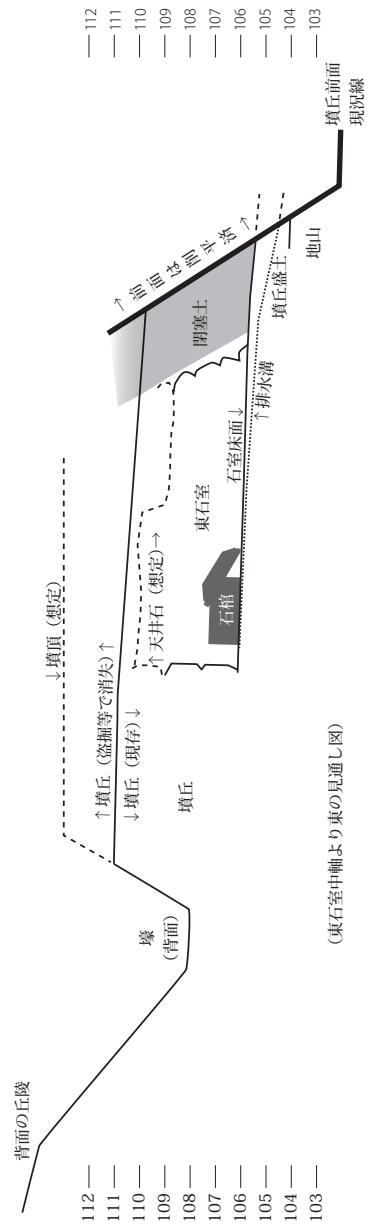


図11 墳丘縦断面模式図

13 mの比高差がある。平坦地北側と南東隅で岩盤を検出し、古墳築造以前はこの間が深い谷地形であったことを確認している。古墳築造時に谷を埋め立てて整地を行い、墳丘前面に広い空間を造り出している。谷が深い2トレンチ西側中央付近では、整地層の厚さは最大約2.0 mに及ぶ。整地層の断面については2001年調査区を再掘削した壁断面で確認している。

整地に用いられた土は主として、東側は黄・橙・褐色粘質土、西側は橙・赤色粘質土からなる。東側では厚さ約0.05～0.15 m単位で互層上に細かく盛土を施す地点も存在するが、盛土の状況は場所による差が大きい。谷が深い地点については黄灰褐色砂質土で大きく埋め立てた後に、上記の盛土を施している。

整地層内からは阿蘇溶結凝灰岩の小片が出土している。

4. まとめ

今回の調査では墳丘前面および前庭部に関する情報を得ることができた。

墳丘前面については、後世に大幅に改変されてしまっており、当初の墳丘裾の正確な位置や前庭部から石室内に至る墓道の構造については不明である。しかし、それにより墳丘前面の土層断面を観察することが可能となり、墳丘・石室の構築過程やその後の変遷について多くの知見を得ている。

とくに両石室の閉塞土を確認したことは貴重な成果である。盛土により石室開口部周辺を広く覆い隠すという方法は、これまでに知られている横穴式石室の閉塞方法としては非常に特異な例であり、植山古墳の特殊性を反映していると考えられる。また、このような閉塞方法が存在しているということは、今後の横穴式石室の調査・研究にも重要な影響を与えると考えられる。閉塞土が施された時期は、少なくとも西石室の構築よりも後である。背面丘陵の柱列（新）と同様、墳丘築造および埋葬から時期を経た段階においても古墳の管理がなされ続けていることを示している。

墳丘断面や前庭部を形成する整地層の状況からは、古墳を築造するにあたり旧来の地形を大幅に改変していることが確認できる。墳丘本体のみならず、前庭部を造り出すためにも広範囲に多量の盛土を施している点は注目に値する。植山古墳に費やされた労力の大きさがうかがえる成果と言える。

(石坂泰士)

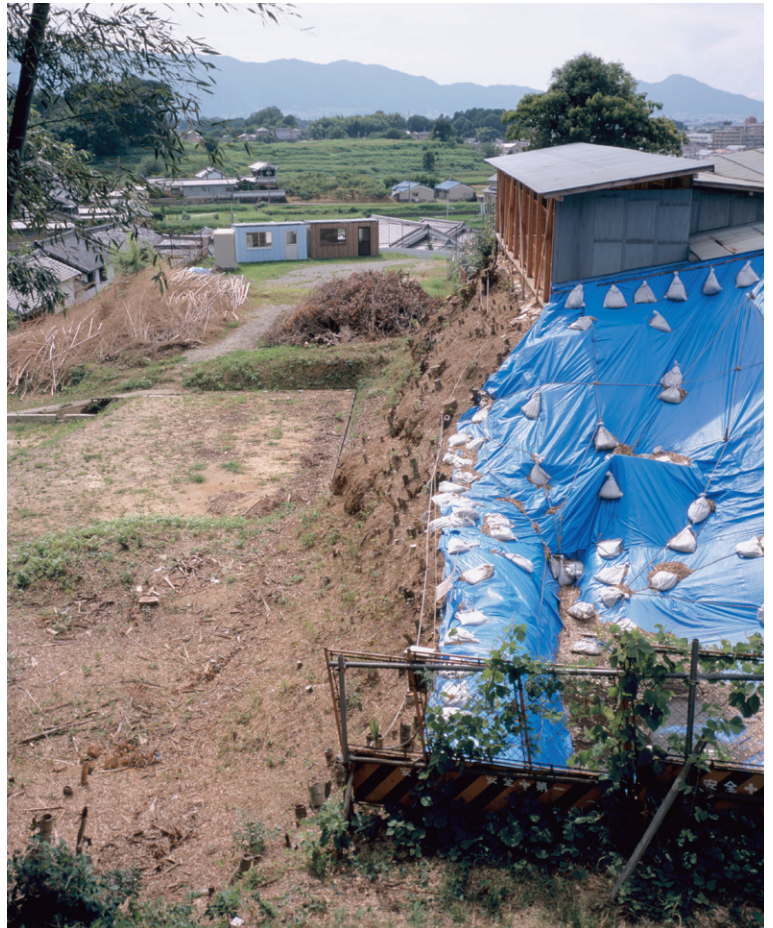


写真19 墳丘前面 調査前 - 東から。覆屋下が石室 -



写真20 南側平坦地 東半 (1・2トレンチ) 完掘状況 - 南から -



写真21 墳丘前面完掘状況 - 南から -



写真22 西石室前面 閉塞土検出状況 - 南から -



写真23 東石室羨門部 閉塞土検出状況 - 北西から -



写真24 東石室前面 閉塞土検出状況 - 南から -



写真25 墳丘南西部 墳丘盛土・地山検出状況 - 南から -



写真26 南側平坦面東部（2トレンチ）整地層断面 - 北西から -

菖蒲池古墳

調査地 菖蒲町地内

調査期間 平成 24 年 12 月 11 日～平成 25 年 3 月 15 日

調査面積 172.5 m²

調査原因 範囲確認調査

1. はじめに

菖蒲池古墳は 7 世紀代の終末期古墳と考えられている。玄室には非常に優美な家形石棺が 2 基、南北に並べて納められ、1893 (明治 26) 年発行の『大和國古墳墓取調書』には、現況とほぼ同様の石室の様子が記録されている。また、1927 (昭和 2) 年には石室部分が国史跡に指定されている。さらに 2007 (平成 19) 年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」の構成資産の 1 つとして、世界遺産暫定一覧表記載資産候補に記載されている。

このように菖蒲池古墳は古くから注目され、その重要性が指摘されてきた。しかし、これまで本格的な発掘調査は実施されておらず、墳丘も早くに失われていたようで、墳丘の痕跡は現状では全く残っていない状況であった。そこで、榎原市教育委員会では、2008 年度に古墳周辺の測量調査を、2009 年度から継続的に範囲確認のための発掘調査を行っている。今回の発掘調査は、第 4 次調査にあたる。

2. 既往調査の成果

これまで 3 次にわたる発掘調査では、墳形及び墳丘規模、古墳築造後の古墳の変遷が明らかとなっている。これらの項目についてまとめる。

墳形は、二段築成の方墳で、墳裾及び上段墳丘裾には基底石が 1 段、めぐる。基底石は石英閃緑岩を使用し、外側に面を持つ。また、上段テラス面及び古墳側面の墳裾には砂利敷、古墳南面の墳裾には、礫敷が敷設される。なお、ここで使用している砂利敷と礫敷の違いは、敷設の密度の差をもとに 2010 年度調査 (第 2 次調査) の際に呼び分けたもので、礫の大きさや小礫を敷きつめる点では共通する。墳丘斜面には、上段も下段も葺石や貼石はなかったと考えられる。

墳丘の構築方法は、調査区や地点によって異なるため、一概にまとめることはできない。1 トレンチの調査成果では、墳丘下段は地山を削り出して墳丘コアを造り、その表面に化粧土を置くという工法である。一方、墳丘上段では、盛土して構築した墳丘コアの表面を削り整えた後、基底石掘方を掘削する。その後、基底石の設置とテラス面の整地を行い、墳丘斜面は土嚢状の土を用いて化粧、テラス面には砂利敷を敷設して、墳丘の構築を完了している。一方、1 トレンチの南側に位置する 7 トレンチの調査では、墳丘下段の構築方法は、墳丘コアの部分の

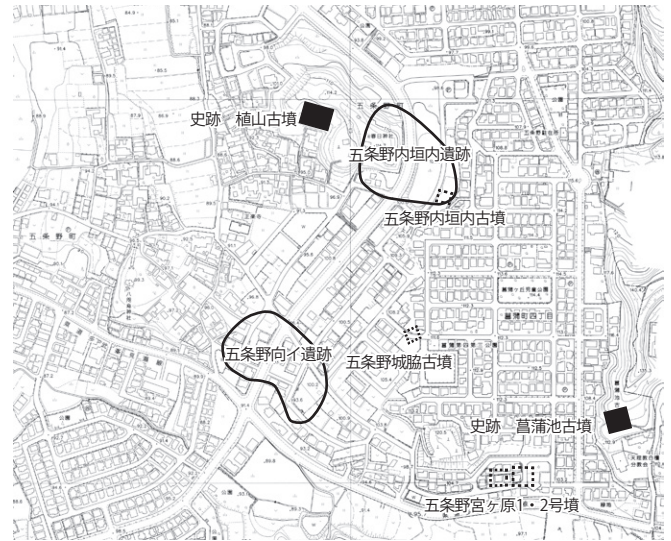


図12 発掘調査地と周辺の飛鳥時代の遺跡 (S=1/5,000)

構築に際し、まず地山を削り出し、墳丘のコアとなる部分を残して平坦面を削り出す。次に整地の後、版築及び盛土によって墳丘を造る。その後の基底石据付及び仕上げの工程は、1 トレンチの成果と同一である。このように、菖蒲池古墳では、墳丘の北半と南半で墳丘の構築方法が異なる可能性がある。

古墳築造後の古墳の変遷については、藤原宮期には墳丘南西隅が盛土整地され、石組溝が敷設される (5 トレンチ)。藤原宮期以降には、地震により墳丘南西隅が地滑りを起こす。近世になると古墳一帯が耕地化され、墳丘が大きく削平されて、現在の風景となる。

3. 調査の方法

今回の調査では古墳の南北方向の墳丘規模の確定と古墳関連遺構の確認を目的に、古墳北東隅 (10 トレンチ) と古墳の東側 (9 トレンチ) に調査区を設定した。

なお調査は、全ての工程を人力で行った。調査後は、遺構面を土嚢及びブルーシートで保護した後に調査区を埋め戻し、調査前の状況に復旧している。

4. 調査成果

9 トレンチ (古墳関連遺構の調査)

現在、古墳の東側には南北にのびる高まりがあり、平成 21 年度調査 (1 トレンチ) では、この上面で柱穴を検出していた。そこでこの柱穴を中心に調査区を設定し、調査を実施したところ、2 時期の遺構を確認した。

古い時期の遺構は、古墳が造られている丘陵の東斜面において検出した石敷である。石敷は、南北方向に主軸をもつと考えられ、東辺のみを検出している。規模は幅 2.0 m 以上、長さ 4.5 m 以上である。形状は、川原石を面を揃えて敷き詰めたいわゆる玉石敷で、石敷の西辺には結晶片岩を立て並べた縁石と、川原石を並べた縁石がある。また、石敷は丘陵基盤層に版築状の盛土を行い、その一部に平坦面を設けた後、その上面に敷設され

ている。なお平坦面に関し、石敷の西の縁石と丘陵の斜面との間には、石敷のない空地がある。

新しい時期の遺構は、この石敷を埋めた後に造られた掘立柱建物である。これは9トレンチ及び10トレンチにまたがる遺構で、北側柱の一部と、東側柱の一部、間仕切り？の柱穴の一部を検出している。南北4間以上(9m)、東西5間(15m)と考えられ、柱間は、3.0m(10尺)等間と考えられる。また間仕切り？の柱列は東西にのびるもので、北辺の側柱から2間南の柱筋にある。なお、今回の調査では、庇となる柱穴はない。

柱穴は、いずれも平面形が一辺1.1～1.2mの隅丸方形を呈し、柱抜き取り穴を持つ。本調査で検出した柱穴は全部で7基で、そのうちの2基は柱穴の年代を明らかにするために半截して調査を行った。しかし出土遺物はなく、遺構の年代に関わる情報を得ることはできなかった。

10トレンチ(古墳の調査)

調査の結果、菖蒲池古墳の北東隅、掘割及び掘立柱建物の一部を検出した。なお掘立柱建物は9トレンチで記述したので、ここでは記述しない。

古墳北東隅において墳丘裾基底石は、調査区内では東辺で6石(2.5m)、北辺で4石(1.2m)を確認した。墳丘裾基底石はこれまでの調査で検出した基底石と同様、外に面を向けて1段を立て並べる構造で、北東角の基底石は北辺と東辺の2面をもつ。また高さは0.1～0.2mである。なお本調査における基底石の検出により、本古墳の墳丘規模は南北長も約30mであることが明らかとなり、菖蒲池古墳の墳丘は東西・南北とも約30mの2段築成の方墳と確定した。

墳丘下段斜面は良好に残存している。既往調査と同様、貼石の痕跡は全くなく、赤褐色の粘質土により化粧されている。

掘割底は、墳丘北東隅では、幅0.1～0.2mと非常に狭い。古墳の南半の調査(4・5・7トレンチ)では砂利敷を確認していたが、本トレンチでは砂利敷は敷設されず、掘割埋土を除去すると、地山及び基底石の据付掘方が確認できる。掘割埋土中にも砂利敷を構成する石材は全く含まれないので、古墳の北東隅には掘割底にはもともと砂利敷が敷設されていなかったと考えられる。

掘割は、高さ3.3mを検出した。外面は下半が赤褐色・褐色・暗褐色・黒色系からなる粘質土ブロックによって覆われ、上半はバイラン土と粘質土の互層からなる。この粘質土ブロックやバイラン土と粘質土の互層積みについては、掘方埋土である可能性も指摘されていたため、断ち割り調査を実施した。その結果、粘質土ブロックは、削った丘陵基盤層の前面に人為的に積んだ土であることが明らかとなった。

さらに、断ち割り調査では、最下段の粘質土ブロックの下面において溝を検出した。この溝は掘割に沿って弧を描いている

が、仕上げ土の幅の中におさまっている。また溝の内側の上端は、粘質土ブロックの前面のラインと一致している。このことは、菖蒲池古墳の北東隅においては、もともと狭い掘割を計画したことを示すと考えられる。

なお、掘割は底部の一部を除いてすべて人為的に埋め戻されている。この埋め戻しの過程で、鋸歯状の土層が形成されている。そこで補足調査として鋸歯状の土層の表面を水洗したところ、鋸歯状の粘質土の表面に皺状の凹凸を確認した。これが土嚢などの痕跡であると仮定すれば、菖蒲池古墳は一部を土嚢積みによって丁寧に埋め戻されていたとすることもできる。

4. 今後の課題

本調査では、古墳の規模確定や掘割の構築方法の解明、古墳の東側にある遺構の検出など大きな成果を得た。その一方で、幾つかの課題も残すこととなった。

まず、石敷の性格である。石敷面からの出土遺物はないものの、近接する土層からの出土遺物を参考にすれば、石敷と菖蒲池古墳は同時期の遺構である可能性がある。しかし、古墳外の遺構であるうえに検出範囲が非常に狭いため、遺構の性格を判断することは今のところ困難である。

掘立柱建物と菖蒲池古墳との関わりも課題の1つである。掘立柱建物の平面形は勿論であるが、掘立柱建物が建てられた時期に菖蒲池古墳がどのような状況であったのかは今のところ分からない。しかし、掘立柱建物の北西隅柱は現況における掘割の上端ラインから非常に近接している点には注意しなければならない。

以上を今後の課題とし、史跡の追加指定や、石棺・石室の保存、史跡整備を進めていきたい。(松井一晃)



写真27 9トレンチ 調査前風景 - 東から -



写真28 9トレンチ 上層遺構検出状況 - 西から -



写真29 10トレンチ 上層遺構検出状況 - 東から -



写真30 10トレンチ 上層遺構完掘状況 - 東から -



写真31 9トレンチ 完掘状況 - 東から -



写真32 10トレンチ 古墳北東隅完掘状況 - 北東から -



写真33 10トレンチ 古墳北東隅完掘状況 - 東から -



写真34 10トレンチ 南壁土層 -北から-



写真35 10トレンチ 掘割表面の検出状況 -南西から-

大藤原京左京五条八坊、中嶋遺跡

調査地 東池尻町地内

調査期間 平成 24 年 11 月 19 日～ 25 年 2 月 15 日

調査面積 350 m²

調査原因 市道飛騨ふるさと公園線拡幅

1. はじめに

調査地は、榎原市の東端部、香具山の北東 1.1 km、戒外川左岸に位置する。また、当該地は桜井市池之内から派生する丘陵の北西端にあたる。

周辺の地形は、戒外川左岸から西方の御厨子観音が位置する丘陵にかけて、長さ約 300 m、幅 20～55 m、高さ 2～3 m の土手状の「高まり」が谷を塞ぐ形で帯状に延びる。この高まりとその南に広がる水田を、かつて和田萃氏は「磐余池」と推定された。

当教育委員会では、平成 21 年度より市道「飛騨ふるさと公園線」の拡幅工事に伴う事前調査を実施している。平成 23 年度の発掘調査により堤や建物など重要な遺構が確認されたため、道路計画を変更し、その保護を図った。今回、道路計画の変更となった路線の大部分は、遺構が遺存しない明治に築かれた「東池」上を通るが、路線の南部が堤上に位置するため、発掘調査を実施することとなった。

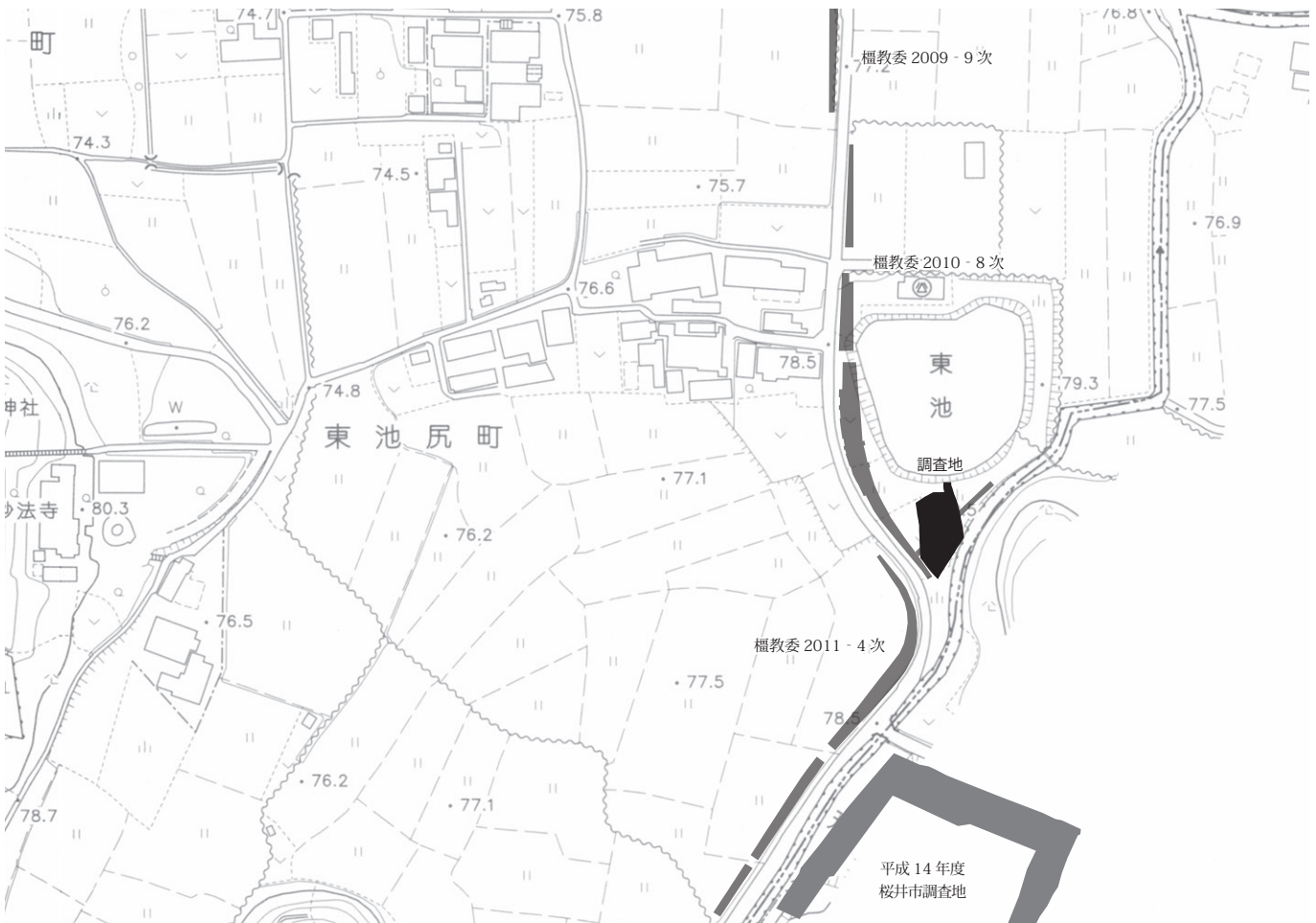


図14 発掘調査地位置図 (S=1/2,500)

2. 調査概要

調査の結果、堤は 4 時期 (I～IV 期) にわたって造成されている事が明らかとなった。造成範囲は、東西 13 m、南北 11 m である。堤の裾部では石敷、砂利敷、石列を確認した。また、堤中央部では前年度の調査で確認した大溝の東肩が南北方向に延びることが明らかとなった。

各時期の遺構とその年代は以下の通りである。

【I 期】 弥生時代後期の遺物包含層及び地山上面に石敷 1 を施す。

堤は、北東方向に傾斜し、その先端に石敷 1 を施し、弥生時代後期の遺物包含層及び地山により構成される。

石敷 1 は、調査区北東隅に位置する。弥生時代の遺物包含層、或いは一部地山を掘り込み、その中に土を入れ、整形した後に石を敷いている。平面形は矩形を呈し、東西 2 m 以上、南北 4 m 以上の規模をもち、直径 (一辺) 0.05～0.5 m の石 (円礫) が不規則に敷き詰められている。堤側に幅 1 m の平坦面をもたせた石敷 1 は、北東方向に傾斜あるいは階段状に落ち込んでいる (高さ約 0.3 m)。石敷上面の出土遺物から 6 世紀後半頃と考えられる。

【II 期】 I 期の堤上面に厚さ 0.3～0.6 m を盛土し (盛土 1)、石敷 2、砂利敷、石列 1 を施す。

堤は、盛土 1 により構成される。

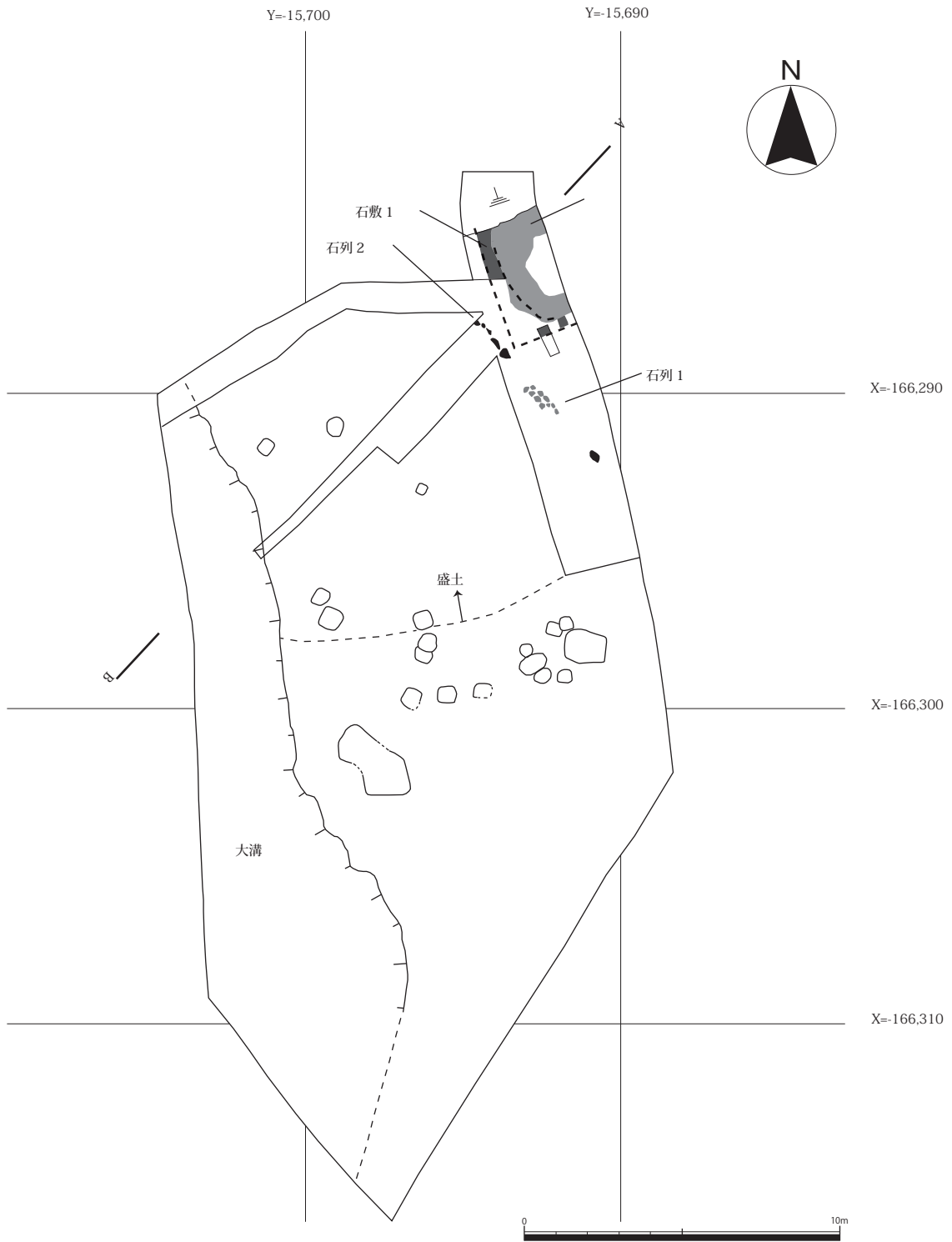


図15 遺構平面図 (S=1/200)

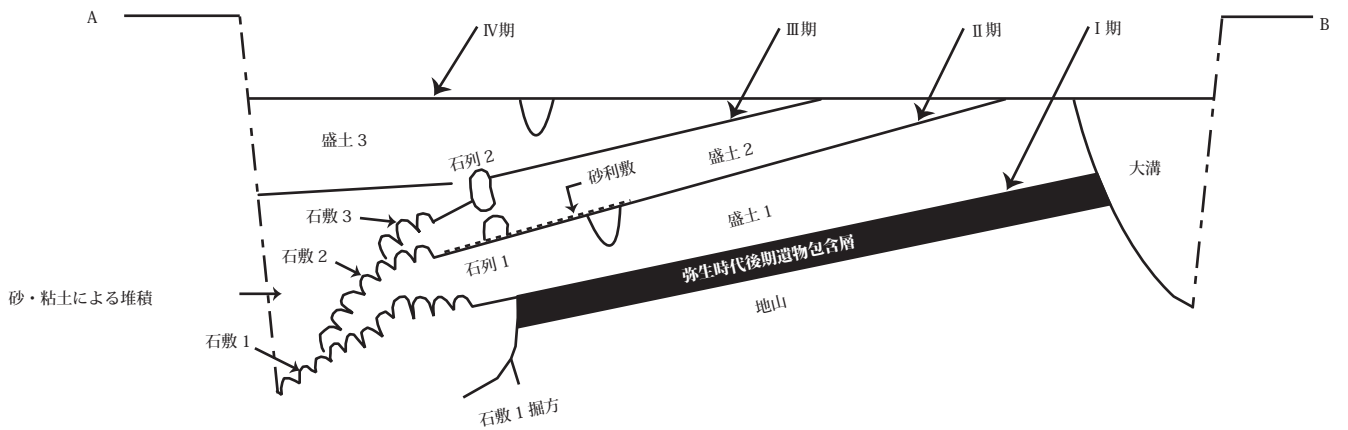


図16 断面模式図

石敷2は、石敷1との間に厚さ0.3～0.4 m程で盛土し、その上に石を敷いている。また、平面形は半円形を呈し、北東に向かって傾斜する。縁石として直径0.2～0.5 mの石(円礫)を設置するなど、石敷1と違いが認められる。

砂利敷は、調査区東部に直径0.05～0.55 mの石と粗砂をまばらに敷き詰めたもので、その範囲は東西2 m以上、南北8 mを測る。石列1周辺のみには施されており、Ⅱ期の堤全面には広がらない。

石列1は、砂利敷の上位に直径0.05～0.25 m(直径)の石を南東―北西方向に2列設置している。検出長は1.3 mを測る。Ⅱ期の年代は6世紀後半以降、7世紀末以前である。

【Ⅲ期】Ⅱ期の堤上面に厚さ0.2～0.5 mを盛土し(盛土2)、石敷3、石列2を施す。

堤は盛土2により構成される。

石敷3は、石敷2との間に厚さ0.1～0.2 mを盛土し、その上に石を敷いている。その範囲は、石敷2の縁石付近のみ敷かれている。

石列2は、石列1と同じ向き(南東―北西)で、直径0.2～0.6 mの石(円礫)を1列に並べ設置している。検出長は6.5 mを測る。

Ⅲ期の年代は6世紀後半以降、7世紀末以前である。

【Ⅳ期】Ⅲ期の堤上面に厚さ0.1～0.5 mを盛土する(盛土3)。

堤は盛土3により構成される。Ⅳ期では、石敷及び石列の埋没後、盛土3がその上位に施されている。盛土の範囲は、Ⅱ・Ⅲ期がそれぞれ石敷2・3までであるが、Ⅳ期には東方に4 m以上、堤の拡張を行っている。出土遺物から7世紀末頃に施されたと考えられる。

堤中央部に大溝の東肩が南北に延びる。大溝の規模は、検出長約25 m、検出幅6.3 m、深さ3.2 mを測る。埋土は、微砂と粘土層をそれぞれ0.1～0.5 mの厚みで交互に積み上げて埋め立てられていた。なお、同遺構の掘削時期がⅡ・Ⅲ期に遡る可能性がある。

3. まとめ

・当該場所の堤は、3度にわたる盛土造成が行われていた。各造成により徐々に堤が高くなり、Ⅳ期の段階ではⅠ・Ⅱ・Ⅲ期の石敷等を覆い、更に東へ堤が拡張されたことが明らかとなった。

・今回確認された堤に伴う石敷のうち、向きが分かる石敷1(北で西に21°)、石列1・2(北で西に42°)と、平成23年度の調査で確認された大壁建物(北で東に5°)、掘立柱建物(北で西に22°～23°)、竪穴建物(西で北に30～35°)との



写真 36 調査区全景 遺構完掘状況 南東から

向きを比較すると、石敷1が掘立柱建物（6世紀後半頃）に近い向きとなる。同時期に形成される遺構は同じ向きとなる傾向があることから、それぞれの遺構は併存していた可能性が考えられる。

・石敷1～3は、北東方向の斜面上に形成された盛土の先端に位置し、堤裾に相当する場所にあたると思われる。

以上のように、石敷は堤裾にあたる場所に設置されていること

から、堤の護岸施設であった可能性が考えられる。護岸を行った要因は、「①雨水対策」、「②今回の調査地の北東に残る「樋ノ口」と呼ばれる地名から、調査地周辺には池の水を排出するための施設の存在が推測され、堤裾を水による侵食から防ぐため」等が考えられる。よって、石敷は、①、②それぞれを要因として、或いは両者を要因として施された可能性がある。

（平岩欣太）

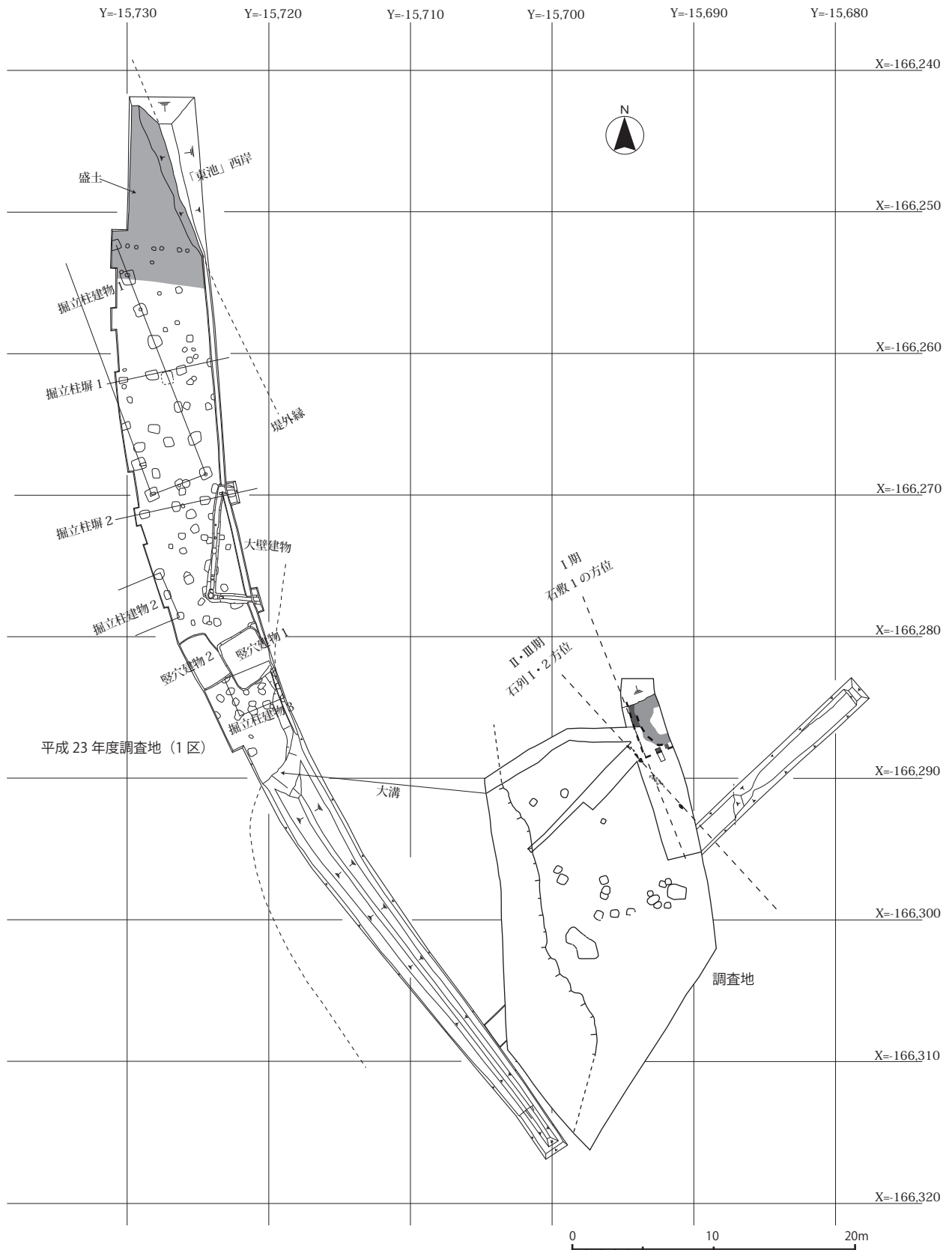


図17 1区 下層遺構平面図 (S=1/400)



写真 37 調査区全景 遺構完掘状況 - 北西から -



写真 38 調査区全景 遺構完掘状況 - 北東から -



写真 39 大溝 土層断面 - 南から -



写真 40 調査区北東部 石敷・石列・砂利敷出土状況 - 北北東から -



写真 41 調査区北東部 砂利敷・石列・石敷出土状況 - 南東から -



写真 42 調査区北東部 石敷出土状況 - 北東から -



写真 43 調査区北東部 石敷出土状況 - 西から -



写真 44 調査区北東部 石敷出土状況 - 南南東から -

千塚山遺跡

調査地 川西町地内

調査期間 平成 25 年 1 月 28 日～平成 25 年 3 月 15 日

調査面積 650.0 m²

調査原因 公園造成（新沢千塚古墳群公園整備事業）

1. はじめに

調査地は県道戸毛・久米線「川西」交差点から東に約 100 m、県道の南側に位置する現況荒蕪地である。調査地は南から北に伸びる二本の尾根に挟まれた谷部にあたり、概ね南西から北東方向に段々状に低くなる地形を形成している。今回の調査地点はその北西部にあたる。

調査地は弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である千塚山遺跡の範囲に含まれる。また、調査地の西・南・東辺は史跡新沢千塚古墳群の指定範囲と接しており、周囲には古墳が多数存在する。

調査地では整備事業の検討に先立ち、2008 年度に当教育委員会が試掘調査を実施している（榎教委 2008-6 次調査）。試掘調査地点は、南の谷筋中央付近および西の高台部分である。試掘調査によって弥生時代以降の遺構・遺物の存在を確認している。この試掘調査の成果を踏まえて整備事業を進めている。今回、遺構面までの深度が浅い調査地の北西部について、発掘

調査を行うこととなった。なお、今回の調査地の南半には、試掘調査区 3・4 トレンチの北半が含まれている。

2. 調査の概要

調査区南半は、西側の丘陵裾から張り出した高台部分にあたる。一方、調査区北半は南の高台よりも上面が約 0.6～0.8 m 低い谷の底部になっている。両者の境界部分には西北西-東南東方向の里道が通っている。調査区北半の谷部上面は、北側の県道よりも最大で約 2.0 m 低くなっている。

調査は重機で遺構面まで掘削を行い、残る作業は人力で進めている。

現地表面から遺構面までの深度は全体に約 0.2～0.4 m と浅く、表土直下ないし耕作層（厚さ 0.2 m 未満）直下で遺構面を検出している。遺構基盤層は、調査区南側では花崗岩風化土の地山、調査区中央付近では褐灰色・黄灰褐色土（弥生～古代の遺物包含層）、調査区北側では黄色粘土・褐色粘土の地山である。地山面は、調査区中央付近から北～東に向かって低く傾斜している。調査区中央付近の遺構基盤層である褐灰色・黄灰褐色土は、その斜面上に堆積した遺物包含層である。包含層下の地山上に遺構は見られない。なお、調査区南半の東西・南北方向の溝は 2008 年度試掘調査区の壁溝である。

遺構には、耕作溝、溝、土坑、ピットがある。

調査区中央から南側の高台上で耕作溝が出土している。規模はいずれも幅約 0.2 m、深さ約 0.1 m 前後である。溝の方向は

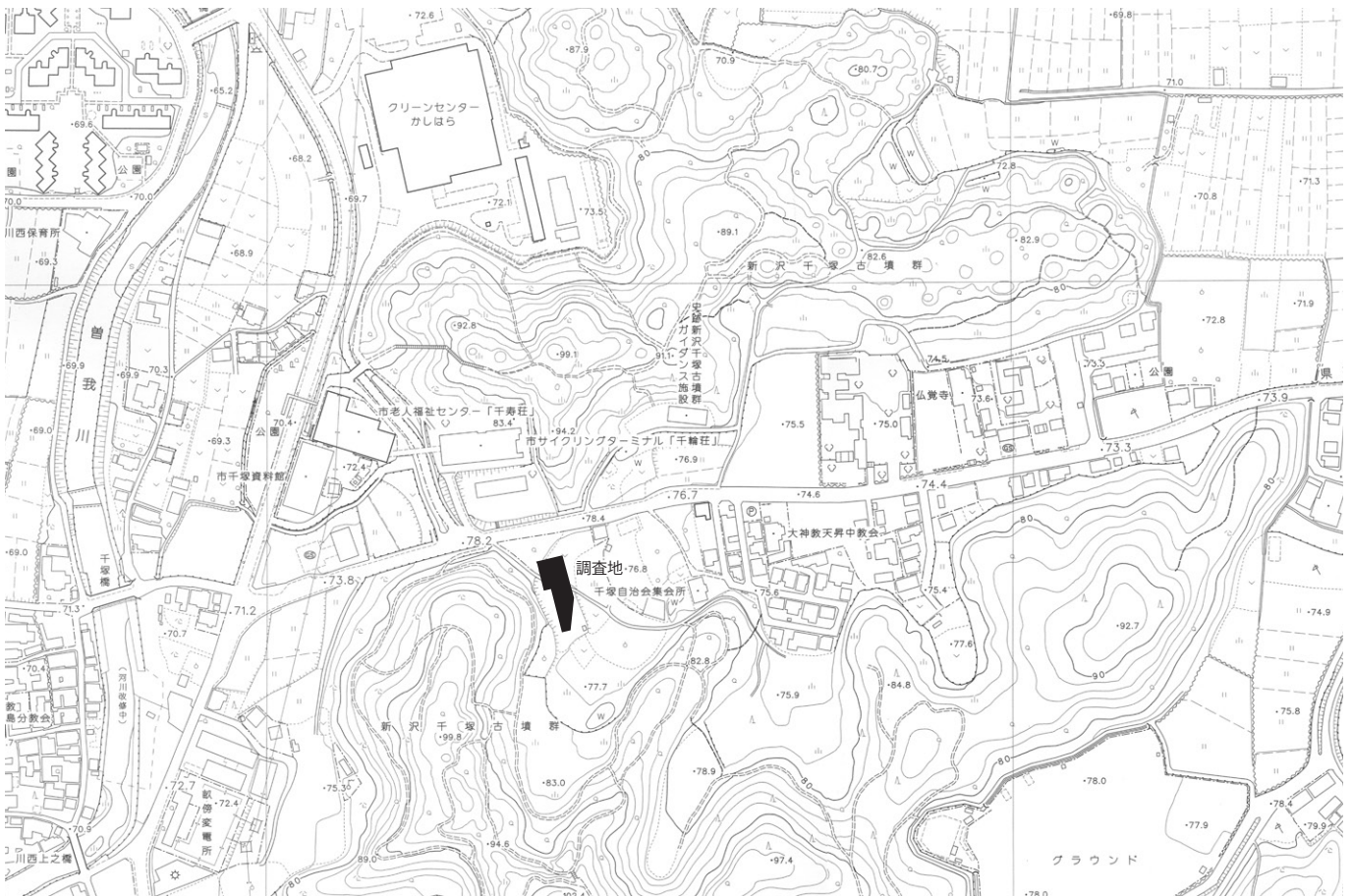


図18 発掘調査区位置図 (S=1/5,000)

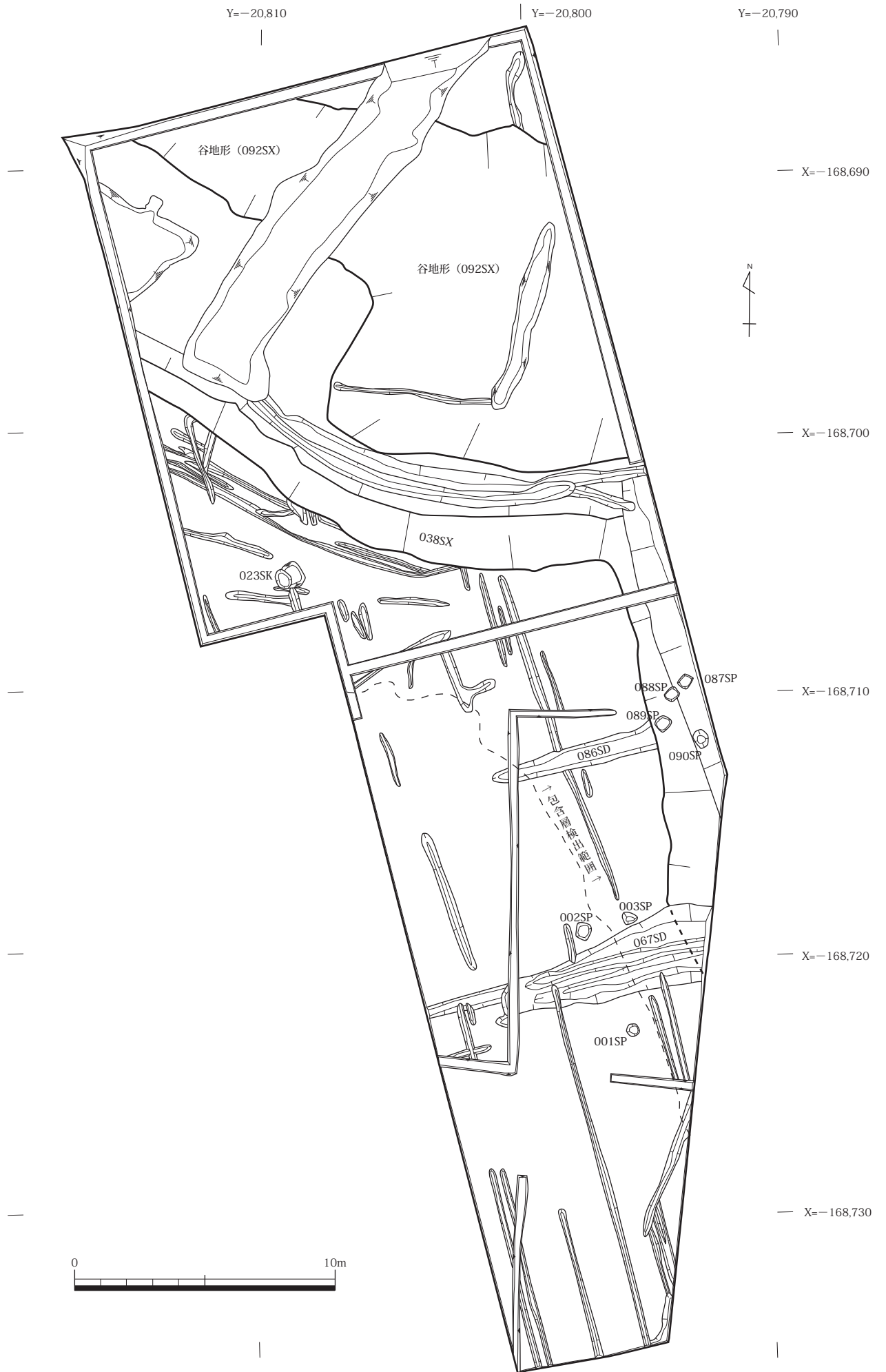


图19 遺構平面図 (S=1/200)

正方位からずれており、北北東—南南東方向のものと西北西—東南東のものがある。これらは地形に即した方向に掘られたようである。耕作溝の時期は、古代以降であるが出土遺物が少なく詳細は不明である。

調査区南半には耕作溝より古い時期の溝が2条存在する(067SD、086SD)。溝の方向は耕作溝と直交する。溝の底面は西から東に向かって低くなる。溝の時期は不明である。

高台の縁辺部にあたる北から東にかけての範囲には、土坑・ピットが存在する(023SK、001～003・087～090SP)。023SKは直径約0.7m、深さ約0.4mの円形土坑である。古代の土師器が出土している。001～003SPは調査区南半に位置する円形ピットである。規模はいずれも直径約0.5m、深さ約0.15mを測る。時期は古代以降である。087～090SPは調査区東側中央、高台縁辺の斜面部で検出したピットである。087～089SPの平面形は一辺約0.4mの方形を呈する。これらは掘方の形状や埋土の共通性、遺構の位置関係から一連の構造物である可能性がある。古墳時代～古代の土器が出土している。

調査区北側には西北西—東南東方向に伸びる谷筋が存在する(092SX)。092SXの底面高は北西端で検出面-0.35m(H=77.3m)、東端中央で検出面-0.7m(H=76.8m)であり、北西から南東に向かって低くなる。092SXの堆積土(灰褐色砂質土を主とする)からは弥生土器、埴輪、古墳時代～古代の土師器・須恵器が出土している。数的には土師器・須恵器が多数を占め、弥生土器・埴輪は少量である。出土遺物の時期は調査区中央の斜面上に堆積する包含層の遺物と同様である。両者の境界部分は後世に削平されており、詳細な时期的前後関係は不明である。

高台縁辺部は近世以降に盛土を施して整形が行われており、里道もその上に築かれている。また、斜面裾には排水用と考えられる溝が巡らされている。

3. まとめ

今回の調査では、古代以降の遺構および弥生時代以降の遺物の存在を確認している。遺構は高台の縁辺部にあたる北～東側に存在しており、丘陵寄りの南西側は後世の土地改変によって削平されている。谷の堆積土や古代以降の遺構埋土からは、古墳時代の土器・埴輪が出土している。これらは丘陵上部から流出してきたと考えられる。その他、古代の土器も出土している。数量は古墳時代の遺物と同程度である。古代に属すると考えられる遺構の数は限られるものの、遺物の出土量から考えると調査地近辺で古代に何らかの活動が行われていたことは確かである。古墳群との位置関係をふまえると非常に興味深い成果と言える。

(石坂泰士)



写真45 遺構検出状況 - 南東から -



写真46 遺構検出状況 - 北西から -



写真47 遺構検出状況 - 北から -



写真48 遺構検出状況 - 北西から -



写真49 谷地形検出状況 - 南から -



写真50 調査地全景 - 北西から -



写真51 調査区南半 包含層遺物出土状況 - 北西から -



写真52 調査区南半 包含層遺物出土状況 - 南東から -



写真53 調査区北半 谷埋土遺物出土状況 - 東から -



写真54 調査区北半 谷埋土遺物出土状況 - 南から -



写真55 調査北半谷地形断面 - 東から 攪乱部分 -

Ⅱ．出土遺物保存処理事業

1. 金属製遺物保存処理

発掘調査によって出土した遺物の中には、その材質によって地中から外気に触れることで大きく変形し、劣化・崩壊するものがある。それを防ぎ、出土した状態を保持するため、各材質に応じた化学的処理を行っている。

鉄や銅などの金属を材料として製作された遺物は長時間土の中に埋まっていると錆による劣化が進み、本来の形状が不明になる。そのため、泥や錆を除去し、脱塩・樹脂含浸を行い、遺物を強化し、劣化の進行を防ぐ。

遺 跡 名		遺物名	点数
榎教委1990 - 10次	藤原京右京七条二坊	銅製金具	1点
		銅銭	24点
榎教委1998 - 11次	藤原京右京一条一坊	筒形銅製品	1点
		釘	1点
榎教委2008 - 8次	大藤原京右京北一条三坊	鉄斧	1点
榎教委2009 - 5次	藤原京右京三条三坊	釘	1点
榎教委2009 - 7次	大藤原京右京十二条五坊、下ツ道、丈六南遺跡	刀子	1点
榎教委2011 - 8次	大藤原京右京三条八坊、四条遺跡	耳環	2点

2. 菖蒲池古墳 剥ぎ取り版築土保存処理

平成23年度菖蒲池古墳発掘調査により、版築が確認された。版築とは、土を層状に重ね、棒で突き固める工法で、寺院の基壇等、建物の基礎を強固なものにするため、朝鮮半島を経由してもたらされた技術である。日本では主に宮殿や寺院等の巨大な建物の基礎に用いられ、古墳では高松塚古墳やキトラ古墳などに用いられている。そこでこの工法を示す土層を後世に残すために、その一部を現地で壁面の剥ぎ取り作業を行った。

剥ぎ取られた土層は、そのままの状態では内部の水分が蒸発し、やがて崩壊してしまうため化学的な処理を施し、額装することによって、展示・観察が可能となる。

(剥ぎ取り土層保存処理)

- ①エポキシ樹脂系接着剤を使用し、剥ぎ取り土層をパネルに接着し、圧着させる。
- ②土層の欠損部分などがある場合や落下の危険がある石材等がある場合は状況に合わせて調整する。
- ③土層の状況に合わせて、土の固着と観察をしやすくするために、樹脂の塗布を行う。
- ④展示用の額縁を作製し、仕上げる。

(田原明世)

Ⅲ．文化財諸申請処理業務

平成24年度文化財諸申請処理数一覧表

	発掘調査の届出	埋蔵文化財発掘届出					埋蔵文化財発掘通知					現状変更		踏査	一部変更	取下書	
		通知内容					通知内容					許可申請	完了				
		発掘調査	工事立会	慎重工事	工事先行	計	発掘調査	工事立会	慎重工事	工事先行	計						
道路						2	6	1		9	2	1					
住宅		3	5	4	1	13											
個人住宅		1	45	178		224										5	
店舗		9	2	6		17								1	7		
住宅兼			1	1		2											
その他建物	1	3	6	24		33		9		1	10	5	1			1	
宅地造成		14	4	8		26										4	
その他開発			1	9		10			1	4	5	3	3				
ガス等			1	3		4		24	6		30	2				1	
農業基盤								1			1						
農業関係	2		1	1		2	1	7			8		1				
河川								1									
学校		1		1		2											
工場		1		1		2											
公園造成							1				1						
学術												2	3				
遺跡整備												10	6				
計	3	32	66	236	1	335	4	49	11	1	65	25	16	1	19		
総件数																	

IV. 普及啓発事業

1. 資料の貸出

文化財の普及啓発事業として、出土遺物や写真等の保管資料の貸出を行っている。

貸出先	貸出資料	借用目的
檀原市（観光課）	八木札の辻交流館 外観写真：1点 新沢千塚古墳群出土ガラス碗・ガラス皿・金属製品写真：各1点	観光パンフレット「檀原観光ガイド」に掲載
	藤原京復元模型写真：1点	記紀フォーラム「壬申の乱と神武伝承」の講演資料に掲載
檀原市（企画政策課）	今西家住宅、豊田家住宅、中橋家住宅、上田家住宅、音村家住宅、旧米谷家住宅、河合家住宅、高木家住宅写真：各1点	檀原・高市広域行政事務組合作成の飛鳥地方PRパンフレットに掲載
檀原市（議事課）	植山古墳東石室 家形石棺：1点	「かしはら市議会だより」第181号（平成24年6月1日発行予定）表紙に掲載
奈良県立教育研究所	軒丸瓦レプリカ 30個	研修講座「授業に生かせる教材作り（2）拓本作成」に使用
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 飛鳥資料館	菖蒲池古墳出土 土器片：18点、石片：4点	平成24年度冬期企画展「飛鳥の考古学2012」に展示
	菖蒲池古墳 5トレンチ（西から）、5トレンチ 地滑り痕跡（北西から）、5トレンチ西壁 地滑り痕跡、6トレンチ（北東から。中央奥は玄室天井石）、家形石棺写真：各1点	平成24年度冬期企画展「飛鳥の考古学2012」展覧会カタログおよび写真パネル・広報に掲載。
	植山古墳 東石室玄室 写真：1点	飛鳥ガイドブック「タイムトラベラー・飛鳥発 A time traveler from Asuka」（仮題）に掲載
	新堂遺跡（上門ヶ坪地区） 川跡出土 石皿：1点、磨石：1点、縄文土器鉢（内面赤色塗彩）：1点、打製石斧：1点、磨製石斧：1点 ・貯蔵穴出土 ミニチュア土器：1点 ・土器棺墓出土 縄文土器深鉢：1点 五井遺跡 川跡出土 土鍾：2点、槽：1点、高坏：1点、壺：2点、甕：1点、ミニチュア土器：5点、竪穴建物出土 ミニチュア土器：2点、小型丸底壺：2点、鉢：1点 菖蒲池古墳 整地層出土 須恵器 坏蓋：1点、坏身：1点、平瓶：1点、石組溝出土 須恵器 坏蓋1点、新堂遺跡（二又・釜焼地区） 川跡出土 土師器 甕（大）：2点、土師器 甕（小）：1点、須恵器 器台1点、須恵器 二重ハソウ：1点、井戸出土 鬼面墨書土器：1点、土師器 皿（大）：1点、土師器 皿（小）：1点、瓦器 皿：1点、瓦器 碗：1点、池状遺構出土 台付き土師器 皿：2点、土器埋納ピット出土 土師器 皿（大）：2点、土師器 皿（小）：2点 新堂遺跡（上門ヶ坪地区） 調査区全景航空写真：1点、川岸に並ぶ貯蔵穴（北西から）写真：1点 五井遺跡 調査区全景航空写真：1点、川の東岸の竪穴建物（南から）写真：1点 菖蒲池古墳 墳丘南西隅と石組溝（南西から）写真：1点、上段墳丘の検出（北東から）写真：1点、既製のパネル図「菖蒲池古墳想定図と調査区の位置」：1点 新堂遺跡（二又・釜焼地区） 調査区全景航空写真：1点、鬼面墨書土器出土状況写真：1点、池状遺構全景（南西から）写真：1点 新堂遺跡（上門ヶ坪地区） 調査区全景（南から）写真：1点、流路及び貯蔵穴（北西から）写真：1点、水場遺構（北西から）：1点、水場遺構検出状況写真：1点、水場遺構（南西から）写真：1点 五井遺跡 古墳時代遺構配置図：1点、調査区全景（東から）写真：1点、川 土器出土状況写真：1点、調査区東半 建物群・畠（南西から）写真：1点 菖蒲池古墳 墳丘南西隅と石組溝（南西から）写真：1点、上段墳丘の検出（北東から）写真：1点	速報展『大和を掘る30』に展示及び図録に掲載

奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	新堂遺跡(二又・釜焼地区) 調査区全景航空写真:1点、 鬼面墨書土器写真:1点、土器埋納ピット(南から)写真:1点、 土器埋納ピット土器検出(5段階あり)写真:5点、土器埋 納ピット完掘写真:1点	速報展『大和を掘る30』に 展示及び図録に掲載
	漆塗匙(藤原京右京五条四坊出土):1点、同資料写真:1点	秋季特別展『『日本国』の誕 生〜古事記ができたころ〜』 に展示及び図録に掲載
	一町遺跡出土(石鏃3点、石庖丁未成品1点、砥石1点、 流紋岩原石1点、結晶片岩原石1点) 石器集合写真:1点(橿原考古学研究所附属博物館撮影デジ タル写真)	春季特別陳列『弥生時代の 石器ーリサイクルの先駆けー』 に展示
	四条大田中遺跡出土遺物・フイゴ羽口:3点、フイゴ羽口片: 24点、鉄滓一括、銅滓の付着した須恵器:3点、ガラス滓: 2点 藤原京右京五条四坊出土遺物・土馬:8点、てづくね土器: 8点	常設展示及び研究資料とし て活用
葛城市歴史博物館	藤原京右京五条四坊 下ツ道東側溝 出土遺物 田原本町 教育委員会保管写真資料(唐古・鍵考古学ミュージアム展 示図録 vol.11「道の考古学」掲載)	平成25年度春季企画展「竹 内街道の成立」図録に掲載
荒神谷博物館	坪井・大福遺跡出土 絵画土器:1点 坪井・大福遺跡出土 絵画土器 写真:1点	平成25年度特別展『『古事 記』の装い』に展示及び広 報誌・チラシ・図録・ポス ター・目録・パネル等に掲 載
新潟県立自然科学館	鳥屋ミサンザイ古墳 鳥居写真:1点、航空写真:1点	トキの森公園において新潟 県立自然科学館が開催する 特別展『Nipponia nippon』 に展示
ふじみ野市立上福岡歴史民俗 資料館兼大井郷土資料館	西新堂遺跡出土帚 写真:1点	特別展『ほうきの文化ーふ じみ野編ー』展示パネル・ 展示図録に掲載
NPO 法人 国際縄文学協会	観音寺本馬遺跡出土 クリ根株写真:1点、木組遺構写真: 1点、環状杭列写真:1点	会報誌『縄文』24号に掲載
一般社団法人 日本考古学協会	大藤原京左京五条八坊調査区北半部建物群(北から)写真: 1点	『日本考古学年報』64号 (2011年度版)巻頭写真に 掲載
晩成小学校区地域福祉推進 委員会	八木札の辻交流館 外観写真:1点	小学校区地域福祉推進委員 会行動計画の冊子に掲載
見瀬町自治会	百人一首絵馬 写真:23点	見瀬町秋祭に展示
朝日新聞出版 分冊百科編集部	丸山古墳空撮 写真:1点	週刊朝日百科『新発見!日 本の歴史』9号に掲載
	藤原京復元模型 写真:1点	週刊朝日百科『新発見!日 本の歴史』10号に掲載
朝日学生新聞社 出版部	植山古墳 東石室 写真:1点	朝日小学生新聞「考古学」 連載(菊池 徹夫・著)お よび連載をまとめた書籍に 掲載
株式会社 榎出版社	藤原京復元模型 写真:1点	『仏像探訪4号』に掲載
株式会社 NHK エンタープ ライズ	藤原京復元模型、植山古墳出土品 馬具の歩揺(飾り金具) 写真:1点	NHK オンデマンドにてイン ターネット配信
	温石(新堂遺跡寺地垣内地区・橿教委2007-4次発掘調査出 土) 写真:1点	地上波、衛星、ケーブル、 IPTV、VOD、航空機内上映、 美術館等における上映を目的 とした海外の放送等事業者 に提供
株式会社 かぎろひコミュニ ケーションズ	大藤原京左京五条八坊調査地1区(堤と池)写真:1点	大和路小誌『やまとみち』 126号テーマ「磐余池跡と 古代磐余地方」に掲載

株式会社 学研教育出版	藤原京復元模型 写真：1点	『歴史をつくった女性大事典』に掲載
	藤原京復元模型 写真：1点	『ビクトリー 中学社会版』中学生向け教科書傍用社会科副教材（ネット配信）に掲載
喜多酒造株式会社	藤原宮式軒丸瓦 拓本：1点	毎年12月に発売する「しぼりたて生酒」「にごり酒」（720ml、1.8ℓ）ラベルデザインモチーフにするため
株式会社 新人物往来社	藤原京復元模型 写真：1点	『歴史読本』2012年7月号に掲載
株式会社 新泉社	丸山古墳 航空写真：1点、植山古墳 航空写真：1点	シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊04『古墳時代ガイドブック』に掲載
有限会社 スタジオ・ジップ	植山古墳 航空写真：1点	『入門 天皇の歴史』に掲載
中央公論新社	藤原京復元模型 写真：1点	中公新書電子版 木下正史著『藤原京』内に掲載
	坪井遺跡出土人物線刻画土器 写真：1点	千田稔著『古事記と神々』（仮）に掲載
株式会社 デアゴスティーニ・ジャパン	藤原京復元模型 写真：1点	『週刊歴史のミステリー』改訂版 電子版第4号に掲載
デザインワークスタジオ	上ノ山遺跡絵画土器（写真はデザインワークスタジオ契約写真家撮影のものを使用）	『NARA(仮称)』（海外向け奈良紹介）への掲載
東京書籍株式会社	藤原京復元模型 写真：1点	高校国語資料集「新総合図説国語」の本文中に掲載
医療法人 南風会	五井遺跡出土土器（小型丸底鉢・小型丸底壺・坏・高坏・甕・直口壺・広口壺：各1点） 五井遺跡発掘調査写真パネル（空中写真・竪穴住居出土状況写真・槽出土状況写真：各1点） 藤原京説明パネル：2点 遺跡分布図パネル：1点	病院1階ロビーにおける展示
有限会社 パケット	藤原京復元模型 写真：1点	『わかる！使える！流れでつかむ日本史』に掲載
株式会社 浜島書店	藤原京復元模型 写真：1点	『常用国語便覧（改訂版）』に掲載
株式会社 ベストセラーズ	東の平田家（八木札の辻交流館）外観写真：1点	月刊「歴史人」ホームページに掲載
株式会社 ポプラ社	藤原京復元模型 写真：1点、新沢千塚126号墳出土金製方形透彫金具 写真：1点	『歴史新聞（仮称・全10巻）』（第2巻飛鳥～奈良時代）に掲載
毎日新聞社奈良支局	「なるほど！『藤原京』100のなぞ」2012年3月発行	藤原京や当時のことを読者により知ってもらうため、新聞に原則週1問ずつ転載
株式会社 学び舎	藤原京復元模型 写真：1点	2016年度文科省検定教科書『ともに学ぶ人間の歴史』に掲載
耳成郵便局	称念寺本堂、同庫裡、同対面所内観 写真：計3点	今井町フレーム切手に使用
深萱 真穂	藤原京復元写真（写真は申請者撮影のものを使用）	『歴史読本』2013年4月号に掲載

2. 講師派遣

市内外の要請に応じて、講師の派遣を行っている。

○10月25日(木)

大和発掘!斑鳩考古学セミナー

「大藤原京左京五条八坊(推定磐余池)」

濱口和弘

○11月9日(金)

奈良県退職教職員の会 特別史跡藤原宮跡 大極殿跡見学

藤原宮(京)跡について

米田 一

○平成25年3月16日(土)

よみうり堺文化センター 2013年特別考古学講座

「植山古墳のナゾに迫る」

石坂泰士

3. 書籍刊行

○『観音寺本馬遺跡-京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う

発掘調査報告書-』 橿原市埋蔵文化財調査報告 第1冊

2012年3月21日発行 橿原市教育委員会 編

○『五井遺跡』 橿原市埋蔵文化財調査報告 第2冊

2012年3月21日発行 橿原市教育委員会 編

○『東坊城遺跡』 橿原市埋蔵文化財調査報告 第3冊

2012年3月21日発行 橿原市教育委員会 編

○『藤原京跡-右京十一・十二条三坊、右京十二条三・四坊-』

橿原市埋蔵文化財調査報告 第4冊

2012年3月21日発行 橿原市教育委員会 編

○『曲川遺跡-京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う発掘調

査報告書-』 橿原市埋蔵文化財調査報告 第5冊

2012年3月21日発行 橿原市教育委員会 編

○『藤原京跡Ⅱ-右京三条三坊の調査-』

橿原市埋蔵文化財調査報告 第6冊

2013年3月22日発行 橿原市教育委員会 編

○『藤原京跡Ⅲ、黒田池遺跡-左京一・二条六・七坊-』

橿原市埋蔵文化財調査報告 第7冊

2013年3月26日発行 橿原市教育委員会 編

○『藤原京跡Ⅳ-右京十二条一坊-』

橿原市埋蔵文化財調査報告 第8冊

2013年3月27日発行 橿原市教育委員会 編

○『橿原市指定文化財 東の平田家(旧旅籠)修理報告書』

2013年3月22日発行 橿原市教育委員会 編

4. 庁内展示

○7月9日(月)～8月30日(金)

大藤原京左京五条八坊発掘調査成果展

本庁1階ロビー

○8月1日(水)～9月30日(日)

知っていますか?藤原京

橿原市立図書館2階展示コーナー

○9月3日(月)～10月19日(金)

菖蒲池古墳いろいろQ&A-菖蒲池古墳発掘調査成果-

本庁1階ロビー

○平成25年2月13日(水)～2月27日(水)

平成23年度 かしはらの発掘調査成果展

橿原市観光交流センター2階イベントスペース

(3) 発掘調査現地説明会

○史跡植山古墳の調査

【開催日】平成24年12月15日

【会場】五条野町

○大藤原京左京五条八坊の調査

【開催日】平成25年2月9日

【会場】東池尻町

○菖蒲池古墳の調査

【開催日】平成25年2月23日

【会場】菖蒲町

5. 八木札の辻交流館

奈良盆地には、盆地を東西に横断する横大路、南北に縦断する上ツ道・中ツ道・下ツ道という幹線道路が古代から存在していた。近世・江戸時代になると、横大路を含む河内から伊勢へと通じる道は、初瀬街道もしくは伊勢街道と呼ばれるようになる。また、下ツ道は中街道と呼ばれるようになり、北は奈良を越えて山城まで達し、南は吉野・紀伊方面に通じていた。この2つの街道の交差点は「八木札の辻」と呼ばれ、江戸時代中期以降、伊勢参りや大峯巡礼などで、大変な賑わいを見せた。

八木札の辻交流館(橿原市指定文化財東の平田家(旧旅籠))は、「八木札の辻」交差点の北東角に立地する、木造2階建の建物である。古文書や建築の構造手法などから、18世紀後半～19世紀前半頃に建てられたと考えられる。江戸時代には、「八木・木原屋、嘉右衛門」という屋号の旅籠を営み、大阪から八木を通り、伊勢に至るまでの宿泊所を示した「大阪難波講伊勢道中記御定宿附」という冊子の中で、「浪速講」に属する正規の宿として紹介されている。旅籠を営んでいた当時は、1階が接客及び主人の居室部分として、2階が宿泊施設として利用されていた。

平成17年に空家となったことで雨漏り等による老朽化が進行し、修理が必要な状況となった。「八木札の辻」という歴史的立地状況にあり、かつ希少な旅籠建築を現代に伝える建物であったことから、平成22年6月に市文化財に指定し、土地を

購入、建物は所有者より寄贈を受けた。その後、平成 22・23 年度に修理・整備工事（半解体工事）を行い、平成 24 年 7 月から一般公開を開始した。建物の見学は無料である。八木の町並みを散策する拠点として活用される施設づくりを進めている。なお 2 階の客間 6 室は、句会や演奏会などの各種イベントに使用出切る施設として有料で貸出を行っている。

八木札の辻交流館 施設使用料

施設		時間	
		9:00～12:00	12:00～17:00
2 階	客間1・2・5・6 (8畳間)	1室につき 300円	1室につき 510円
	客間3・4 (6畳間)	1室につき 240円	1室につき 410円

主催事業

- 開館式 平成 24 年 7 月 14 日(土)
- 愛宕祭期間内における夜間特別開館
平成 24 年 8 月 23 日(木)～25 日(土)
- 箏演奏会(勝美会)
平成 24 年 8 月 24 日(金)・25 日(土)
- オペラハイライトコンサート(オペラ レ ミューズ)
平成 24 年 11 月 18 日(日)



写真56 交流館開館式

施設利用状況

① 館利用者数

	開館 日数 (日)	入館者		小計 (人)	貸室		合計 (人)
		日本人観光者 (人)	外国人観光者 (人)		件数 (件)	利用者数 (人)	
合計	216	7,788	17	7,805	28	326	8,131

※1 7月の開館式以降、平成25年3月31日までの利用者数

※2 「奈良・町家の芸術祭HANARART 2012」は貸室数1日を1件として計上している

② 貸室利用状況

	利用形態	期間	内容	貸室状況
1	貸室	9/29(土)	俳句会	客間5・6
2	貸室	10/13(土)	八木地区公民館地域学級講座フィールドワーク	客間5・6
3	貸室	11/1(木)～11/13(火)	「奈良・町家の芸術祭HANARART 2012」 八木エリア会場	全室
4	貸室	11/16(金)	シニアリーダーカレッジ見学会	客間3
5	貸室	11/16(金)	橿原市立晩成小学校見学及び八木町の歴史学習	全室
6	貸室	12/4(火)	子育て支援ボランティア「だっこちゃん」 クリスマスイベント練習	客間5
7	貸室	12/26(水)	奈良県立畝傍高校小倉百人一首かるた部練習	全室
8	貸室	1/12(土)、1/13(日)	チャリティー講演会	全室
9	貸室	1/31(木)	奈良県立畝傍高校小倉百人一首かるた部練習	全室
10	貸室	2/11(月)	奈良県立奈良朱雀高校 奈良朱雀ビジネス企画部報告会	全室
11	貸室	3/10(日)	講演会「大和八木と旧街道の歴史と保存活動について」	客間4・5

6. 千塚資料館改修事業

昭和52(1977)年12月に竣工し、53(1978)年12月の開館以来、抜本的な改修をしておらず老朽化が進行しており、また施設や展示手法は現在のニーズに充分対応していない状況であった。

そこで、当館を平成24・25年度にわたり休館し、文化財政の拠点施設として、当市の歴史遺産を象徴する史跡新沢千塚古墳群や藤原京跡出土資料をメインとするとともに、原始から近世までの遺跡出土資料を展示し、またその資料の一部に触れることで直接歴史の息吹が感じられる体験・体感が可能な魅力ある博物館に改修することとなった。

(1) 千塚資料館大規模改修工事

期間：平成24年6月21日～25年3月15日

受注者：(株)鍛冶田工務店・(株)平成建設特定建設工事共同企業体

(2) 千塚資料館展示改修業務

期間：平成24年7月27日～26年2月28日

受注者：(株)乃村工藝社

(3) 千塚資料館展示ケース製作及び設置業務

期間：平成24年10月31日～26年2月28日

受注者：(株)乃村工藝社



写真57 改修後外観 - 南西から -



写真58 改修後外観 - 北西から -

V. 史跡整備事業

史跡地の公有化

史跡公園整備に向け、史跡指定地の公有化を図っている。

【丸山古墳】

所在地：橿原市五条野町・大軽町(図20)

概要：越智岡丘陵の東、高取川をはさんで東に続く台地の西端に、前方部を北にして築かれた6世紀後半の大型の前方後円墳である。

墳丘全長310m、後円部径150m、前方部幅210mを測り、県下最大の前方後円墳古墳である。石室の全長は26m以上あり、玄室内に2個の家形石棺があることが判明している。

(1) 公有化基本方針

現在、古墳の前方部の一部は国道169号線によって分断された状態にあり、完全な前方後円墳としての形は整えていないが、墳丘の大部分と東側の周濠や周庭帯は部分的にその姿をとどめている。可能な限り古墳本来の姿を保ちつつ、市民生活の中に活用し、保存と活用を調和させながら将来にわたる本市の象徴の一つとしたい。

(2) 公有地化計画

史跡の現況を考慮し3地区に分類し、地区ごとの計画を定める。なお、今後も調査研究や地域の社会環境の変化に応じて地域区分に修正を加えていくものとする。

【植山古墳】

所在地：橿原市五条野町(図21)

概要：甘塚丘から延びる丘陵の西端に位置する東西約40m、南北約27mの方墳である。墳丘の北・東・西側には周濠が巡る。埋葬施設は2基の大型横穴式石室が東西に並ぶ。東石室は全長13m、玄室長約6.5m、玄室幅約3.2mを測る両袖式で、玄室には阿蘇溶結凝灰岩製の削り抜き式家形石棺が置かれている。西石室も全長13m、玄室長約5.2m、玄室幅約2.5mを測る両袖式で、玄門部床面には扉を設置した闕石がある。本古墳は6世紀末から7世紀前半に属すると考えられる。

(1) 公有化基本方針

古墳の保存を前提に、埋葬施設や墳丘等の修復・復原を行い可能な限り公開する。古墳の歴史的な価値と地域住民にとっての公園的機能を併せた整備を行う。また、本市と周辺自治体を含む遺跡群のネットワーク化を行い、本史跡を全体ネットワーク上での拠点として整備する。

(2) 公有地化計画

史跡公園の整備に伴い、地権者に対し当初の土地区画整理事業計画のような土地利用ができなくなることから、史跡指定地の大半の公有化を行った。公有化された場所については、今後公開に向け整備に取り組んでいく。

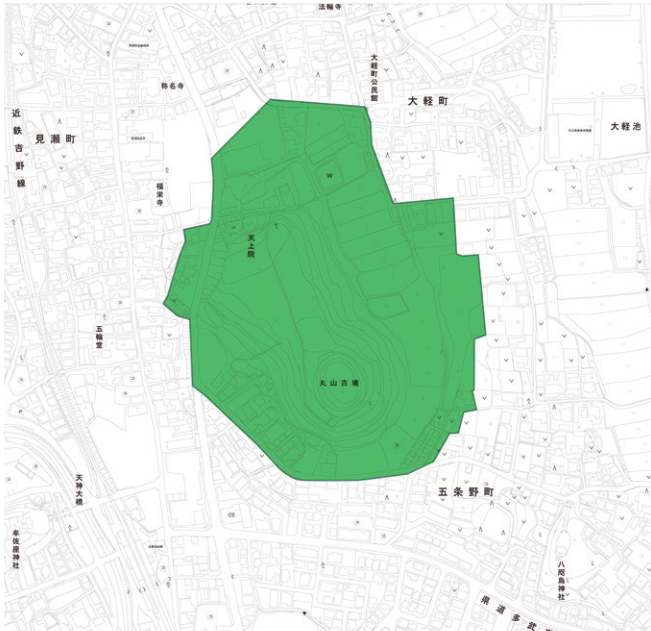


図20 丸山古墳史跡指定範囲図 (S=1/8,000)

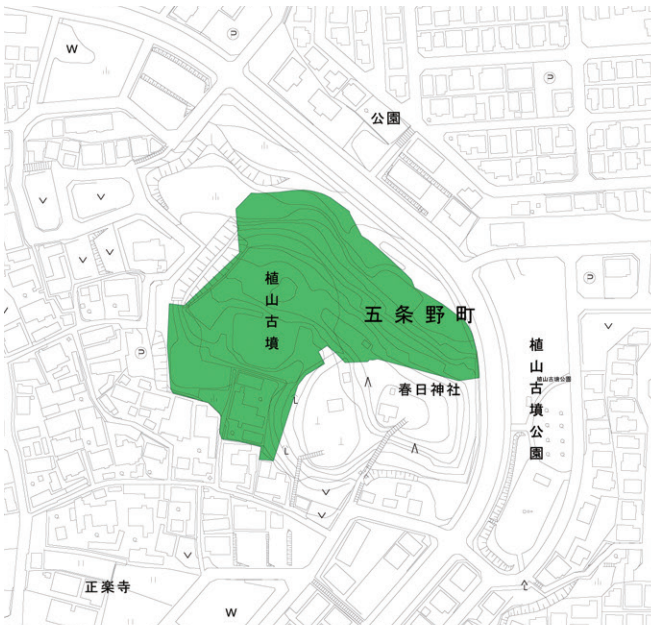


図21 植山古墳史跡指定範囲図 (S=1/4,000)

VI. 指定文化財維持管理事業

1. 草刈

史跡地及びその周辺への雑草の影響を軽減し、また見学者が快適に見学できるように配慮し、年1回以上の草刈を実施している。

○作業箇所

国指定特別史跡本薬師寺跡、国指定史跡新沢千塚古墳群、国指定史跡丸山古墳、国指定史跡菖蒲池古墳、国指定史跡植山古墳、県指定史跡小谷古墳

2. 修理事業

指定建造物の修理事業について、経費の部分補助を行っている。

【解体修理】重要文化財建造物称念寺本堂

【部分修理】重要文化財建造物今西家住宅

市指定文化財建造物入鹿神社本殿

市指定文化財建造物東の平田家（旧旅籠）

3. 管理事業

毎年行われる文化財防火デーにおいては、消防署と文化財所有者立会の下、消防設備の点検を消防署と合同で行っている。

【点検実施箇所】

○国指定建造物榎原神宮本殿（久米町）、国指定建造物人麿神社本殿（地黄町）、国指定建造物久米寺多宝塔（久米町）、国指定建造物称念寺本堂（今井町）、国指定建造物正蓮寺大日堂（小綱町）、国指定建造物瑞花院本堂（飯高町）、国指定建造物今西家住宅（今井町）、国指定建造物豊田家住宅（今井町）、国指定建造物上田家住宅（今井町）、国指定建造物音村家住宅（今井町）、国指定建造物河合家住宅（今井町）、国指定建造物高木家住宅（今井町）国指定建造物旧米谷家住宅（今井町）、国指定建造物森村家住宅（新賀町）

○県指定建造物山尾家住宅（今井町）、県指定建造物旧上田家住宅（丸田家住宅）（今井町）、県指定建造物旧高市郡教育博物館（今井町）、県指定建造物吉川家住宅（山之坊町）

○市指定建造物旧常福寺観音堂付棟札（今井町）、市指定建造物順明寺表門（今井町）

VII. だんじり保存事業

市内に現存する優れただんじりを普及・啓発し後世に伝承することを目的とし、だんじりに関する調査、研究並びにだんじりの維持管理事業を行っている。現在、榎原市には保存会により江戸時代末期から明治時代にかけて製作されただんじりが10台（十市町7台・今井町2台・小綱町1台）が保存されている。

【平成23年度だんじり維持管理】

だんじり提灯張替、はんでん・ターボリン幕作成

平成 2 4 (2012) 年度 橿原市文化財調査年報

発行日 平成 2 6 (2014) 年 3 月 31 日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会
〒634 - 0826 奈良県橿原市川西町 858 - 1
TEL 0744 - 22 - 4001 (代)

印刷 株式会社 明新社
奈良市南京終 3 丁目 464 番地
TEL 0742 - 63 - 0661
